福岡市西区大字片江

片江辻遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1977

福岡市教育委員会

福岡市西区大字片江

片江辻遺跡

片江地区区画整理事業地内遺跡の発掘調査報告書

2

昭和52年3月

福岡市教育委員会

序　　文

文化財行政の当面する課題の一つに，埋蔵文化財の保護対策があります。

近年の産業経済の発展に伴う諸開発事業によって，消滅する遺跡の数は増加の一途をたどっており，この傾向は最近の経済事情のなかにおいても変化のない有様であります。福岡市とて例外ではなく宅地造成その他による開発はとどまるところを知らないのが現状であります。

当教育委員会では，やむをえずして保存できない文化財については事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。

今回の発掘調査は，片江区画整理地域内における緊急調査で，国庫補助事業により実施しました。この調査は，すでに昭和47年度に古墳群を対象として実施しており今回の調査は第2次の発掘調査です。さらにこの地域内には甕棺墓などの存在が知られており今後継続事業として発掘調査を実施していく予定です。

発掘調査の成果につきましては，報告書に見られるように古墳時代の住居跡と，それをとり囲むと思われる溝状遺構，さらに柵状遺構などが検出され，この時代の生活及び集落構造を究明するうえで多くの成果をあげることができました。これも地元作業員を始め多くの人達の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものであって，深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が地域住民はもとより市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に，学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

昭和52年3月

福岡市教育委員会

教育長　戸　田　成　一

凡　　例

1　本書は福岡市西区片江区画整理事業の計画にともない，昭和50年度国庫補助事業として福岡市教育委員会社会教育部文化課が，昭和50年9月16日から12月4日までの約3か月にわたって発掘調査を実施した片江辻（かたえつじ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の執筆と編集は，塩屋勝利と力武卓治が分担，協議して行なったが，福岡市文化課の柳田純孝，二宮忠司，飛高憲雄，井沢洋一，折尾学，柳沢一男，山崎純男氏等の助言と協力をえた。

3　遺構，遺物の写真撮影および実測図の作成，トレースは，塩屋と力武が分担して行なった。

4　写真図版の遺物ナンバーは，挿図の遺物番号と一致する。

5　遺物実測図の縮尺は，須恵器，土師式土器，陶磁器を⅓か⅙に，石製品，鉄製品を½（棗玉は1/1）に統一した。なお遺物写真の縮尺は，石製品が⅔であるほかはすべて不統一である。

6　遺構実測図のうち住居跡実測図は1/60に統一し，各々にその計測値表を付した。

7　表紙題字は有元成瓊氏（西部書作家協会初代会長・九州女子大学教授）よりいただきました。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに……1

1　発掘調査に至るまで……1

2　発掘調査の組織と構成……2

第Ⅱ章　発掘調査の概要……3

1　位置と環境……3

2　発掘調査の経過……7

第Ⅲ章　調査の記録……9

1　遺跡の立地……9

2　調査区の設定……9

3　Ⅰ区の調査……9

4　Ⅱ区の調査……12

柵状遺構……12

5　Ⅲ区の調査……13

第1号溝……14

第2号溝……15

第1号住居跡……16

第2号住居跡……26

第3号住居跡……31

第4号住居跡……32

第Ⅳ章　ま と め……38

あとがき……43

挿　図　目　次

Fig. 1　片江辻遺跡周辺遺跡分布図　（縮尺1/25,000）第Ⅱ章―1 …… 5
Fig. 2　片江区画整理事業区域図　（縮尺1/10,000）第Ⅱ章―1 …… 6
Fig. 3　片江辻遺跡地形図　（縮尺1/600）第Ⅲ章―2 ……10
Fig. 4　Ⅰ区出土須恵器実測図と土層断面図
（縮尺1/3・1/160）第Ⅲ章―3 ……11
Fig. 5　柵状遺構実測図　（縮尺1/60）第Ⅲ章―4 ……12
Fig. 6　Ⅱ区出土石器実測図　（縮尺1/2）第Ⅲ章―4 ……13
Fig. 7　柵状遺構出土須恵器実測図　（縮尺1/3）第Ⅲ章―4 ……13
Fig. 8　第1号溝出土遺物実測図　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……14
Fig. 9　第2号溝出土須恵器実測図と第2号溝土層断面図
（縮尺1/3・1/40）第Ⅲ章―5 ……15
Fig. 10　第1号住居跡実測図　（縮尺1/60）第Ⅲ章―5…折りこみ…16，17
Fig. 11　第1号住居跡出土須恵器実測図(1)　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……18
Fig. 12　第1号住居跡出土須恵器実測図(2)　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……19
Fig. 13　第1号住居跡出土須恵器実測図(3)　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……21
Fig. 14　第1号住居跡出土土師式土器実測図
（縮尺1/3・1/6）第Ⅲ章―5 ……22
Fig. 15　第1号住居跡出土石製品実測図　（縮尺1/2）第Ⅲ章―5 ……25
Fig. 16　第2号住居跡実測図　（縮尺1/60）第Ⅲ章―5…折りこみ…26，27
Fig. 17　第2号住居跡かまど実測図　（縮尺1/30）第Ⅲ章―5 ……27
Fig. 18　第2号住居跡出土須恵器実測図　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……28
Fig. 19　第2号住居跡出土土師式土器実測図
（縮尺1/3・1/6）第Ⅲ章―5 ……29
Fig. 20　第3号住居跡出土須恵器，土師式土器実測図
（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……31
Fig. 21　第3，4号住居跡実測図　（縮尺1/60）第Ⅲ章―5…折りこみ…32，33
Fig. 22　第4号住居跡出土須恵器実測図(1)　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……33
Fig. 23　第4号住居跡出土須恵器実測図(2)　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……34
Fig. 24　第4号住居跡出土土師式土器実測図　（縮尺1/3）第Ⅲ章―5 ……35
Fig. 25　第4号住居跡出土刀子実測図　（縮尺1/2）第Ⅲ章―5 ……37
Fig. 26　Ⅲ区ピット出土棗玉実測図　（縮尺1/1）第Ⅲ章―5 ……37
Fig. 27　第1，2号住居跡切り合い関係実測図
（縮尺1/60）……折りこみ…40，41

写 真 図 版 目 次

本文対照頁

発掘作業員のみなさん…… 2

PL. 1　片江辻遺跡周辺航空写真…… 3

PL. 2　(1) 片江辻遺跡航空写真（昭和51年6月撮影）…… 9

(2) 片江辻遺跡航空写真（昭和51年6月撮影）…… 9

PL. 3　(1) Ⅰ区全景　(2) 第1トレンチ　(3) 第2トレンチ……10

PL. 4　(1) Ⅱ区発掘作業風景　(2) Ⅱ区遺構全景……12

PL. 5　(1) 柵状遺構　(2) 柵状遺構土器出土状況……12

PL. 6　(1) Ⅲ区遺構全景　(2) Ⅲ区遺構全景……13

PL. 7　(1) Ⅲ区第2号溝　(2) 第2号溝土層断面……15

PL. 8　(1) 第1号住居跡　(2) 第1号住居跡かまど……16

PL. 9　(1) 第1号住居跡遺物出土状況　(2) 第1号住居跡出土石製品
……16，26

PL. 10　(1) 第1号住居跡出土須恵器……18

PL. 11　(1) 第1号住居跡出土須恵器　(2) 第1号住居跡出土土師式土器
……19，21，22

PL. 12　(1) 第2号住居跡　(2) 第2号住居跡……26

PL. 13　(1) 第2号住居跡かまど　(2) 第2号住居跡かまど断面……27

PL. 14　(1) 第2号住居跡出土須恵器　(2) 第2号住居跡出土土師式土器……28，29

PL. 15　(1) 第3号住居跡　(2) 第3号住居跡遺物出土状況……31

(3) 第3号住居跡出土須恵器・土師式土器……31

PL. 16　(1) 第4号住居跡　(2) 第4号住居跡……32

PL. 17　(1) 第4号住居跡出土須恵器……33，34

PL. 18　(1) 第4号住居跡遺物出土状況　(2) 第4号住居跡出土土師式土器……35

(3) 第4号住居跡出土鉄製品……37

表　目　次

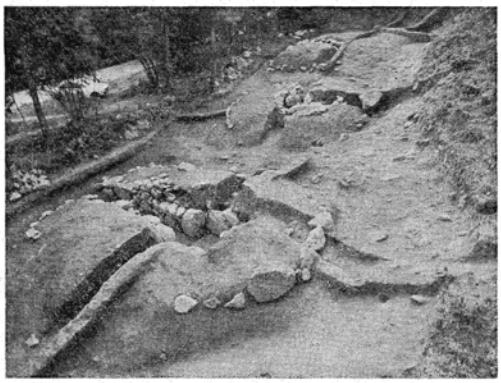
Tab. 1	片江辻遺跡周辺主要遺跡一覧表	第Ⅱ章－1 …… 4
Tab. 2	第1号住居跡計測値表	第Ⅲ章－5…折りこみ…16, 17
Tab. 3	第1号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章－5 ……23, 24
Tab. 4	第1号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章－5 ……24
Tab. 5	第2号住居跡計測値表	第Ⅲ章－5…折りこみ…26, 27
Tab. 6	第2号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章－5 ……30
Tab. 7	第2号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章－5 ……30
Tab. 8	第3号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章－5 ……31
Tab. 9	第3号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章－5 ……31
Tab. 10	第4号住居跡計測値表	第Ⅲ章－5…折りこみ…32, 33
Tab. 11	第4号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章－5 ……36
Tab. 12	第4号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章－5 ……37

第Ⅰ章　はじめに

1　発掘調査に至るまで

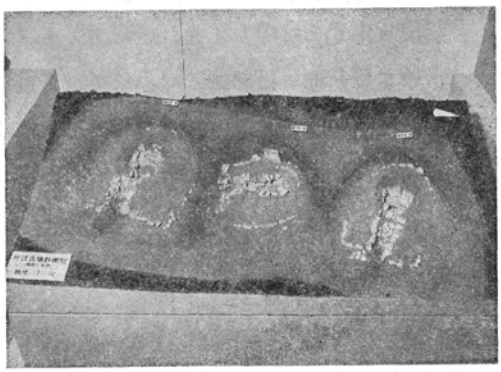
片江地区土地区画整理事業にかかる区域は，南北は油山山麓から神松寺まで，東西が堤から七隈に至る広大な面積に及んでおり，当該地区内の埋蔵文化財について昭和46年度に分布調査が実施された。その結果，山麓部に古墳群があり，丘陵部には甕棺墓，住居跡等が存在することが判明した。

第１次発掘調査は昭和47年度の国庫補助事業として区画整理事業地内に所在する古墳６基，すなわち片江２～４号墳と６～８号墳を対象として実施された。その成果については，すでに報告書が刊行されているとおりであるが，さらに特筆すべきは，調査された古墳群の中で１つの単位群を構成する片江６～８号墳の３基の古墳が現地で保存されることになったことである。このことは，発掘調査が開発を前提とした緊急調査であったにもかかわらず，文化財保護に対する地元の方々のご理解によって現地保存がなされたという点で重要な意義を有するものである。また，この古墳群は福岡市立歴史資料館によって模型が製作され同館に展示されており，現地の古墳とともに文化財の身近な教材として活用されている。



第１次発掘調査（片江６～８号墳）

昭和49年12月になって，それまでの片江区画整理事業準備委員会が発展解消し，片江土地区画整理組合が正式に設立され，具体的に区画整理事業が推進されることになった。計画の具体化に伴い，福岡市教育委員会は，区画整理事業地内に包蔵されている甕棺墓および住居跡等の調査について，区画整理組合と協議を行ない，(1)福岡市西区大字片江字天神地区，(2)片江字辻地区，(3)片江字西地区の３地点を昭和50年度の国庫補助事業として発掘



片江６～８号墳模型（福岡市立歴史資料館展示）

調査するところとなった。

発掘調査は昭和50年9月16日より着手し，天神地区および辻地区については予定どおり終了したが，西地区については区画整理事業の計画との関係で，翌年度以降に持ち越すことになった。

2　発掘調査の組織と構成

1　発掘調査の組織

調査委託者　片江土地区画整理組合

調査主体　福岡市教育委員会

2　発掘調査の構成

調査担当　福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係

事務担当　清水義彦　三宅安吉　国武勝利　木村義一　佐藤正恵　窪田千恵子
柴田陽子　柴田美絵

発掘担当　塩屋勝利　力武卓治

資料整理　花畑照子　高倉栄美　宇美富子　百武謙治

調査協力者

広田長登　大穂亮一　磯山茂十郎　松隈和美　八尋良平　大穂初實　鶴田源太郎
石橋清樹　鶴田　忠　森住千代城　石橋俊次　花田信雄　大津綱治　松尾和三郎
八尋益記　簑原義孝　岡部仁生（片江土地区画整理組合）
大穂儀郎　大穂金作　大穂恒季　柴田清美　花田シズエ　八尋竹子　大穂洋子
花田房子　松尾タキノ　鶴田ナヲ　青木ナオエ　八尋ミヨシ　三穂ムツ子　大穂アサ子
田角由子　八尋カオル　田角ナツエ（発掘調査作業員）
鈴木勤一郎　松尾誠二（小松建設工業株式会社）
日下部　直　岡部直好　龍　陽子　本荘陽子　広田一幸　広田長登（土地所有者）

第Ⅱ章　発掘調査の概要

1　位置と環境 (Fig. 1　Tab. 1　PL. 1)

福岡平野の西部を占める早良平野は，東側を油山山塊より派生して北へ突出する鴻ノ巣山（標高100.5 m）を中心とした平尾丘陵によって限られ，広義の福岡平野と区分される。この早良平野東縁部は，油山北麓より分岐していくつかの低平な丘陵が細長くのび，室見川を中心河川として展開する西側の広大な平野部とは異なり，地形的に1つのまとまった小地域を画している。この地域の主要河川である樋井川は，油山東北麓の谷間に源をもち，その支流の片江川，一本松川，駄ケ原川などの小流が丘陵の間を開析して流れ，流域に狭少な沖積地を形成する。これらの小支流は友泉付近で合流してさらに北流し博多湾に注いでいる。

片江土地区画整理事業の対象区域は，この地域のほぼ中央部を占めている。南北は片江川下流にかかる神松寺橋を北限とし，南は片江川の源，油山北麓の鳥越までの約2.4 Kmの範囲であり，東西は金山の丘陵と堤から片江にのびる丘陵西側斜面に挾まれた南北に長い区域である。地形的には片江川によって開析された沖積地が大部分を占め，南奥部の洪積丘陵と，東部の堤から片江にのびる丘陵の西側斜面をも含んでいる。この地域を含む樋井川流域一帯は，律令時代の早良郡毗伊郷に比定される地域であり，その範囲は福岡市に合併する以前の早良郡樋井川村とほぼ重なるものと考えられる。

ところで福岡市近郊の農業地帯であったこの地域周辺も，最近の急激な都市開発の進展によって急速に宅地化しつつあり，豊かであった自然環境を大きく変貌させている。開発に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査も相ついで行なわれ，歴史の皮肉な側面としてこの地域周辺の過去の歴史が次第に明らかにされつつあることも事実である。この地域の歴史環境については，これまで調査された遺跡の報告書に詳しく述べられているので多くはそれに譲ることにし，ここでは簡単にその特徴を記すことにする。

この地域周辺の先土器時代の資料については，これまで全く知られていなかったが，1976年7月のカルメル修道院内遺跡の発掘調査において尖頭器が出土し，初めてこの地域にも先土器時代の人間の足跡を認め得るようになった。

縄文時代については，油山北麓部の丘陵谷間などに土器や石器の散布地が認められる。押型文土器・石鏃などが採集された箱ノ池遺跡や柏原遺跡，曽畑式土器・石鏃など採集されている五ケ村池遺跡，晩期の条痕文土器を出土した笹栗遺跡をはじめ数か所の遺跡が知られている。

Tab. 1　片江辻遺跡周辺主要遺跡一覧表

対照番号	遺跡名	時代	遺構・遺物	文献・備考
1	京の隈遺跡	古墳・平安	前方後方墳・粘土槨 鉄製品，経塚・銅製 経筒・陶磁器・銅鏡	①段谷地所開発株式会社『京の隈遺跡』1976年
2	神松寺遺跡	弥生前期	甕棺群	②水野清一・島田貞彦「北九州における甕棺調査報告」（人類学雑誌第43巻10・11号）1928年
3	神松寺古墳	古墳後期	円墳・横穴式石室	文献①所収
4	浄泉寺遺跡	弥生・古墳	住居跡・竪穴群	③東洋開発株式会社『浄泉寺遺跡』1974年
5	カルメル修道院内遺跡	先土器 弥生前期	尖頭石器，甕棺 土坑墓　銅釧	文献①所収，銅釧副葬土坑墓は1976年7月に調査
6	片江西遺跡	弥生中期	甕棺	文献②所収
7	五ケ村池遺跡	縄文前期	曽畑式土器，石器	④福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集』1969年
8	七隈古墳群	古墳後期	古墳群8基	1969年第1次，1970年第2次調査。
9	大谷古墳群	古墳後期	20基以上の古墳群	⑤福岡市教育委員会『大谷古墳群Ⅰ』1972年
10	倉瀬戸古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑥倉瀬戸古墳群調査団『倉瀬戸古墳群』1973年
11	片江古墳群	古墳後期	6基以上の古墳群	⑦福岡市教育委員会『片江古墳群』1973年
12	早苗田古墳群	古墳後期	8基以上の古墳群	文献⑦所収
13	鳥越古墳群	古墳後期	5基以上の古墳群	文献⑦所収
14	小笹遺跡	弥生後期	石蓋土坑墓・鉄鏃 祭祀遺構，土器群 石器・鉄器	⑧福岡市教育委員会『小笹遺跡発掘調査報告書』1973年　⑨福岡市教育委員会『小笹遺跡第2次発掘調査報告』1975年
15	宝台遺跡	弥生・古墳	住居跡・甕棺・祭祀	⑩日本住宅公団『宝台遺跡』1970年
16	丸尾台遺跡	弥生中期	甕棺・鉄刀・前漢鏡3	文献⑩所収
17	笹栗遺跡	縄文・弥生 奈良	縄文晩期土器・石器 弥生土器，製鉄遺構	⑪福岡市土地開発公社『笹栗古代製鉄遺跡発掘報告書』1969年
18	瀬戸口古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑫株式会社リコー『瀬戸口古墳群』1975年
19	井手古墳群	古墳後期	4基以上の古墳群	⑬福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集』1970年。1974年秋発掘調査，未刊。
20	大平寺古墳群	古墳後期	8基からなる古墳群	文献⑬
21	箱ノ池遺跡	縄文早・晩期	押型文土器，石器	文献⑬
22	四十塚古墳群	古墳後期	25基以上の古墳群	文献⑬
23	大牟田古墳群	古墳後期	43基以上の古墳群	⑭福岡市教育委員会『大牟田15号・43号墳発掘調査報告』1971年

Fig. 1　片江辻遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）

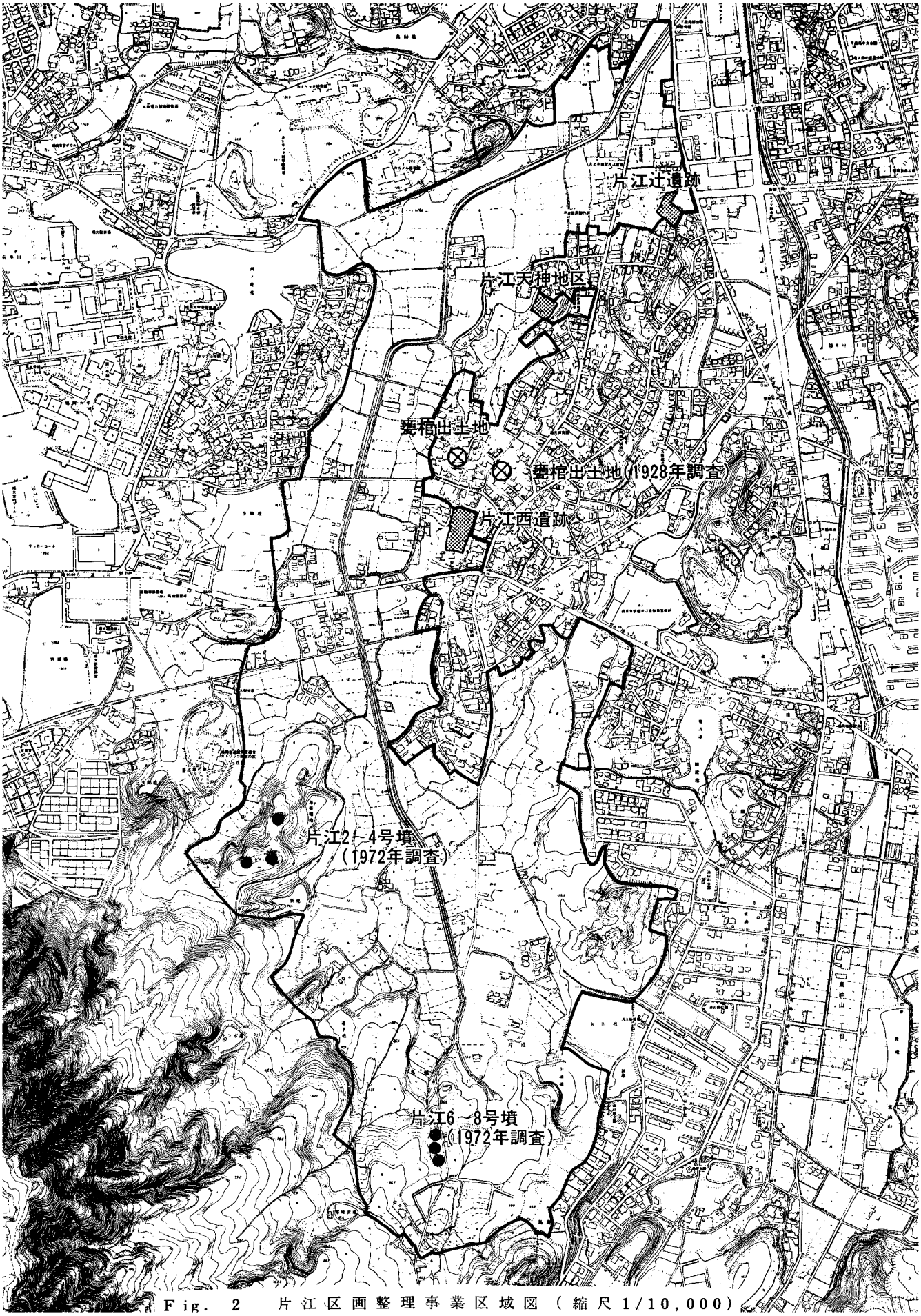


Fig. 2　片江区画整理事業区域図（縮尺1/10,000）

しかしながら，その遺構については全く不明であり，今後の調査に待たなければならない。

弥生時代になると，この地域においても遺跡数は急激に増加し，人々の生活空間として積極的に利用されるようになったことを示すが，早良，福岡の両平野部とは異なり，前期初頭からの連続的発展を証明する遺跡はこれまで発見されておらず，今のところこの地域の弥生時代の幕明けは，前期も終末期以降からである。その後の発展過程は，宝台遺跡の集落構造，丸尾台遺跡の甕棺群と副葬品に見られるように，この地域も北部九州弥生時代中期社会の一般的形態を表現していると言える。後期についても遺跡の分布はさらに拡大すると考えられるが，古墳時代を高塚式古墳に象徴される社会とするとき，その過渡的形態としての墳墓の発見はなく，わずかに浄泉寺遺跡の住居跡群，小笹遺跡の土坑墓群によって，この地域の後期段階を断片的に知り得る程度である。

これまで語られてきたこの地域周辺の古墳時代の特徴は，畿内型古墳の未伝播と，後期における群集墳の爆発的な増加という2点にあったと言える。しかしながら，京の隈遺跡の発掘によって，この地域にも畿内型古墳の存在することが証明され，今後，その事実を踏まえて，この地域の古墳時代の構造的解明をなすべき問題が提起されたと言える。また群集墳については，急激な都市開発に伴い発掘調査例が増加しているところであり，次第に個別的な実態が明らかにされつつあるが，同時代の生産遺跡，集落遺跡などの解明と合せて，その実体を経済的基礎と政治的諸関係との関連において明らかにすべき段階にあると言えよう。

続く歴史時代の実態については，笹栗遺跡における奈良時代の製鉄遺構，京の隈遺跡の平安末期経塚が発見されているだけで，多くは今後の調査研究に待たねばならない。

2　発掘調査の経過 (Fig. 2)

昭和48年度の第1次発掘調査（片江古墳群）に至る分布調査の際，区画整理事業地区内には弥生時代，古墳時代の集落跡や水田跡などが包蔵されていることが指摘されていた。本年度はその結果と新たな知見のもとに，区画整理事業計画の進展と合わせ，幹線道路新設計画地内の次の3地区を発掘調査の対象とすることになった。

① 天神地区……福岡市西区大字片江字天神1186番地

② 辻 地 区……　〃　〃　〃　字辻1095，1096，1097，1101番地

③ 西 地 区……　〃　〃　〃　字西1316，1318番地

天神地区は表面採集によって弥生式土器片，土師式土器片などが得られたところで，住居跡などの包蔵が予想され，辻地区は福岡市遺跡台帳 №551 北片江遺跡の西南隣接地にあたり，古墳時代の住居跡などが包蔵されていると考えられた。また，西地区については，1928年，京都

大学の水野清一・島田貞彦氏によって発掘された甕棺墓包蔵地に南側より対峙する地点で，分布調査においても甕棺の破片が採集され，弥生時代の甕棺墓包蔵地であることが予想された。

発掘調査は9月19日より開始し，まず最初に天神地区を着手した。天神地区は片江集落をのせる丘陵の中央部で，現況は畑作が行なわれ，最高地の標高は23.75 mである。計画道路に合わせ，幅6 m，長さ20mのトレンチを設定して表土削ぎを行なったが，厚さ20cmの耕作土の下はすぐ黄灰色粘土の地山となり，遺物包含層や遺構の掘り込みなど全く検出されなかった。この結果，天神地区は，かつて開墾や博多人形の陶土取りなどによって地山が削り取られ，遺跡はすでに破壊されていたことを確認した。

辻地区は天神地区の発掘と並行して9月19日から伐採作業を先行し，9月25日より発掘にかかった。まず，最も高位のⅠ区より開始し，続いてⅡ区を並行して行なった。Ⅰ区，Ⅱ区の調査を10月18日までに終了し，Ⅱ区で検出された柵状遺構がさらに北側にのびることが確認されたので，Ⅱ区の北側に1段落ちる畑地を新たにⅢ区として10月20日より発掘にかかった。そして，辻地区の全ての調査を12月4日に終了した。

西地区については，区画整理事業計画に問題が生じたところから，本年度は調査を実施できなくなり，来年度以降に持ち越すところとなった。

天神地区発掘調査風景（昭和50年9月）

第Ⅲ章　調査の記録

1　遺跡の立地 (PL. 2)

片江土地区画整理事業の対象地は，すでに記したごとく，片江川によって形成された沖積地が大部分を占めるが，その一部は堤より北にのびる丘陵の西側斜面をも含んでいる。この丘陵は西の片江川，東の一本松川によって開析されて独立丘陵のような観を呈している。片江集落のほとんどはこの丘陵上に営まれているが，宅地化の波は急激に沖積地面にも進展しつつある。

辻地区は，この丘陵の最北端部にあり，片江川と一本松川との合流地付近の狭少な沖積地に面しており，この沖積地を挾んで北の丘陵には，神松寺古墳，浄泉寺遺跡，カルメル修道院内遺跡などの遺跡が存在し，あたかもこれらの遺跡と対峙しているかのような位置関係にある。また昭和4年に友泉より油山に通じる県道油山線の拡幅工事の際，辻地区の東側斜面より合口甕棺が出土しており，さらには福岡市文化課が1970年度に実施した遺跡分布調査の際に，須恵器，土師器が表採され北片江遺跡として登録されていることなどから，遺跡存在の可能性は十分に考えられることであった。なお北片江遺跡という遺跡名は，もとよりその範囲を限定して登録されたものではなく，今回の発掘調査範囲はそれに重複するが，あえて片江辻遺跡と呼称し区別することにした。

2　調査区の設定 (Fig. 3)

片江辻遺跡は，丘陵の突出部にあるために北側に向って傾斜大きく，東側は県道油山線と宅地によって削り落され崖面をなしている。南側はわずかに標高を増しつつ片江集落へ繋がっている。北傾斜面は，3 m程の段差を持って階段状をなしており，現況が旧地形をとどめているとは考えられず，畑耕作時の整形など後世のある程度の人為的な結果によるものであろう。この最も高い段をⅠ区とし，低くなるごとにⅡ区，Ⅲ区と呼ぶことにし，全面に磁北に従って10 m方眼のグリッドを組み，Ⅰ区より調査を開始することにした。

3　Ⅰ区の調査 (PL. 3)

最も高い位置にあるⅠ区は，標高21 m前後で，わずかに北に向って傾斜するがほぼ平坦面を

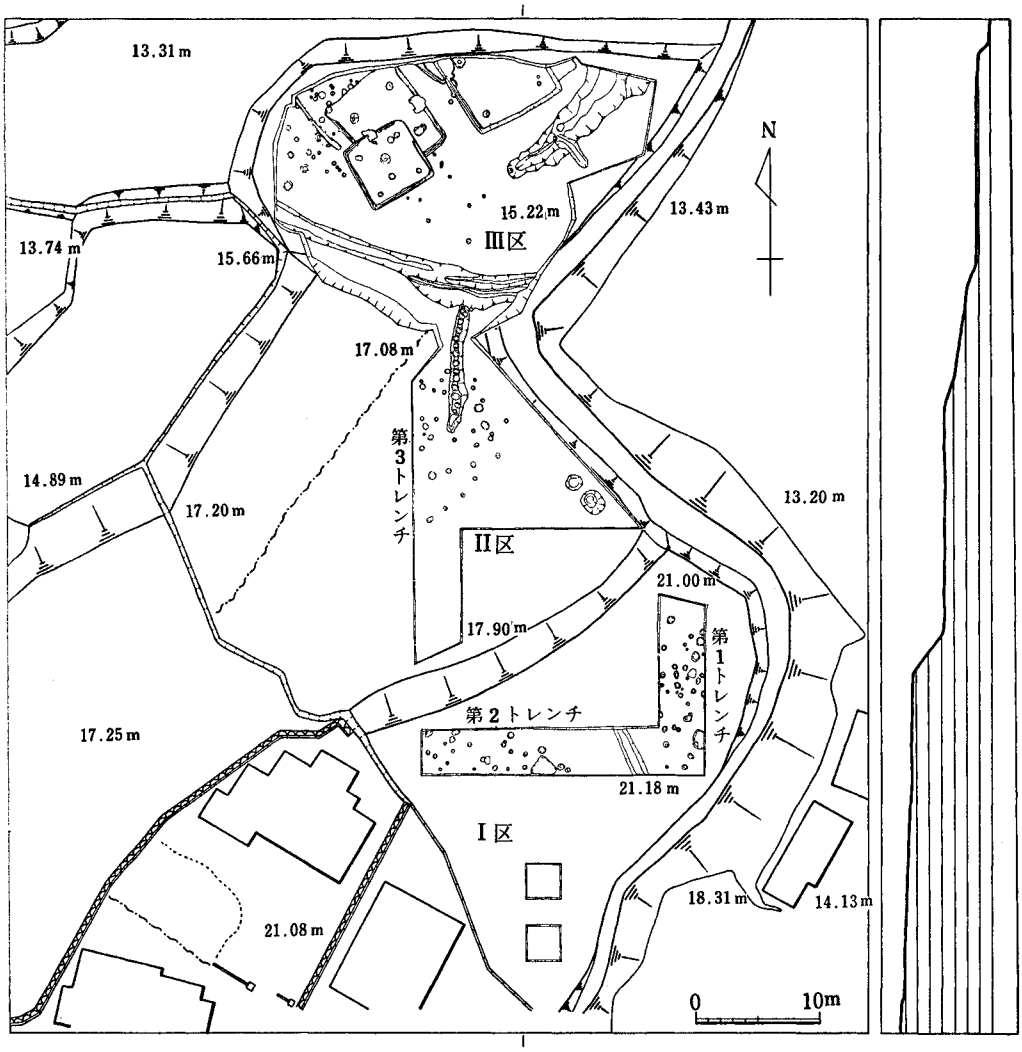


Fig. 3　片江辻遺跡地形図（縮尺1/600）

なしており，県道油山線拡幅工事の際，合口甕棺が出土したという位置に接しており，過去のこうした事実や，周辺遺跡の立地などから甕棺などの弥生時代遺構の存在は当然予想されたのである。このため東側崖面に接して南北に幅4m，長さ15mのトレンチを設定し，これを第1トレンチと呼んだ。第1トレンチでは，耕作土下15～20cm程度で地山が現われ，30数個の小ピットが全面にわたって検出された。これらの小ピットは，大きさ，深さなどに画一性，統一性は認められず，また出土遺物も小破片であり時期決定にも困難な数量であった。このために，第1トレンチの南端に接して西へ直角に20mの第2トレンチを設定し，明瞭な遺構の出現を期待した。第2トレンチでは，第1トレンチとは様相を異にし，地山が東に向って傾斜しており耕作土下に数層の土層が堆積していた。Fig. 4は，第2トレンチ南壁の東西の土層図と西壁の

南北の土層図である。Ⅰ層は耕作土層で約15㎝の厚さで水平な堆積をなしている。Ⅱ層は砂質黄褐色土層。Ⅲ層は第1トレンチと第2トレンチの接合付近で長さ4ｍにわたって検出した北西方向にのびる溝状遺構に堆積している砂層で，近世の染付白磁片が出土した。Ⅳ層は茶褐色土層で約50㎝の堆積をなす。Ⅴ層は暗茶褐色土層で堆積は薄い。Ⅵ層は地山に掘りこまれたピット状遺構に堆積した土層で黒茶褐色を呈している。遺物は，青磁，陶器，須恵器，土師器などで，Ⅰ層よりⅥ層までのすべての層より出土しており，層位的な区別はつけられない。むしろ第2トレンチ西端の低くなっている部分を平坦化したようであり，この推測は遺物の混在と近世陶磁器類の量の多さからも妥当性があるものと思われる。第2トレンチでも20数個の小ピットを検出した。これらはトレンチの西側に集中する傾向にあるが，第1トレンチの小ピット群と同じように，明確な遺構として把握できなかった。さらに第2トレンチの南側に3ｍ×3ｍの小グリッドを2か所で発掘したが，第2トレンチのような土層の堆積もなく，小ピットも検出できなかった。これらのことから，当初の予想は裏切られ甕棺墓などの遺構の検出はできなかったが，地山面の傾斜が北西方向に低くなっており，むしろ低い位置にあるⅡ区，Ⅲ区ほど遺構残存の可能性は大きいものと考えられた。

出土遺物　(Fig. 4)

いずれも小破片で図化しえたのは須恵器の3点のみである。

須恵器（S－1～3）

S－1は坏蓋で天井部を欠く小片で復原口径16.0㎝，口縁部と天井部との間に2条の沈線がめぐる。S－2は坏身で全形の¼の破片である。復原口径13.4㎝あり，底部の回転ヘラ削りは約½を占める。S－1・S－2ともロクロ回転は不明。S－3は甕の口辺部で丸みのある口縁外面下には，櫛で波状文を描き，その下に2条の沈線をめぐらしている。

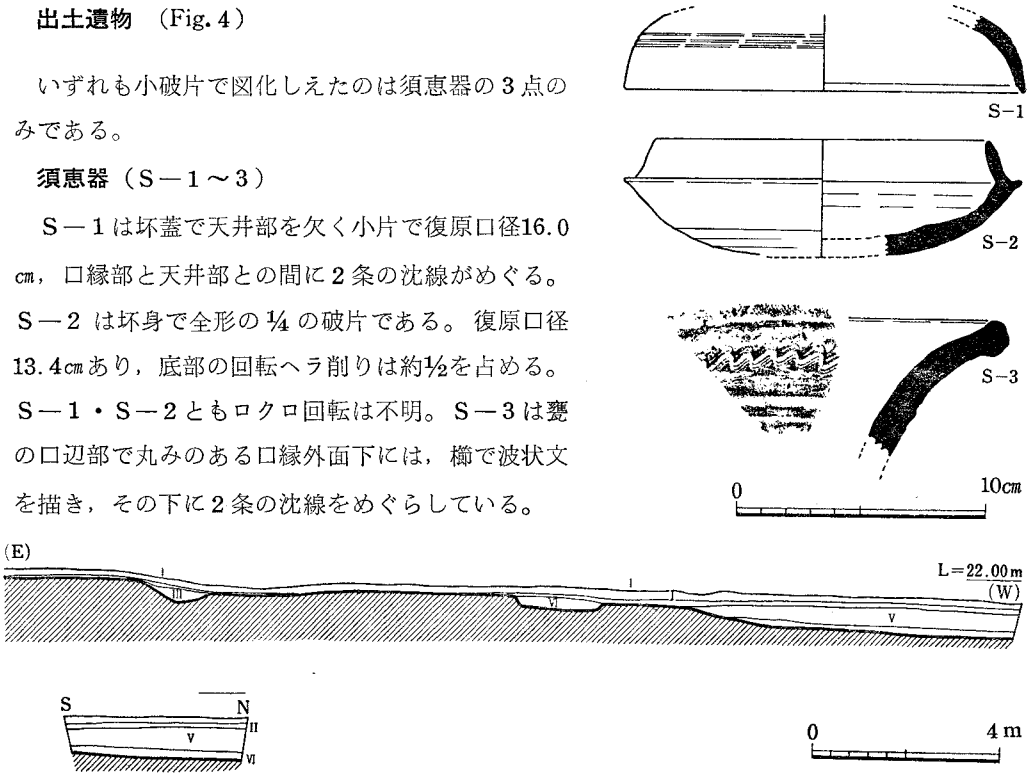


Fig. 4　Ⅰ区出土須恵器実測図（縮尺⅓）と土層断面図（縮尺1/160）

4　Ⅱ区の調査 (PL. 4)

Ⅱ区もⅠ区と同じように平坦な面をなすが，やや北西方向に傾斜している。トレンチは，この中央部に幅 4 m，長さ22m に南北にいれ，第3トレンチと呼称することにした。土層は，耕作土下はただちに花崗岩バイラン土の地山で，30数個の小ピットと南北方向の溝状の落ちこみの一端が現われた。このため小ピットの広がりと溝状遺構の北端を押えるために東北部に拡張したところ，東側崖面近くで直径約 1.3 m と直径約 1.7 m の円形の落ちこみが検出され墓坑と思われたのであるが，無遺物で墓坑と判断する有力な資料は，なんら得ることができず，その性格は不明と言わざるをえない。ただし，耕作土や小ピットの中には，小破片ではあるが弥生式土器，須恵器，土師器，青磁などが出土し，特に小ピットより磨製扁平片刃石斧の完形品が出土したこと，さらには，溝状遺構の北端がもう一段下のⅢ区までのびており，出土遺物の増加とともに標高が低くなるごとに次第に遺跡の中心に近づきつつあることを思わしめた。

出土遺構

Ⅱ区で検出した小ピットは，Ⅰ区の小ピットより深く，より良好な状況を示してはいるものの，かなり削平されているようで柱穴とは断定しがたい。ここでは，北にのびる柵状遺構のみについて記すことにする。

柵(さく)状遺構　(Fig. 5　PL. 5)

第3トレンチで検出した溝状の落ちこみは，幅約 1.2 m 前後，長さ約10m あり，Ⅱ区とⅢ区との間にある崖面で終わっている。傾斜角は，

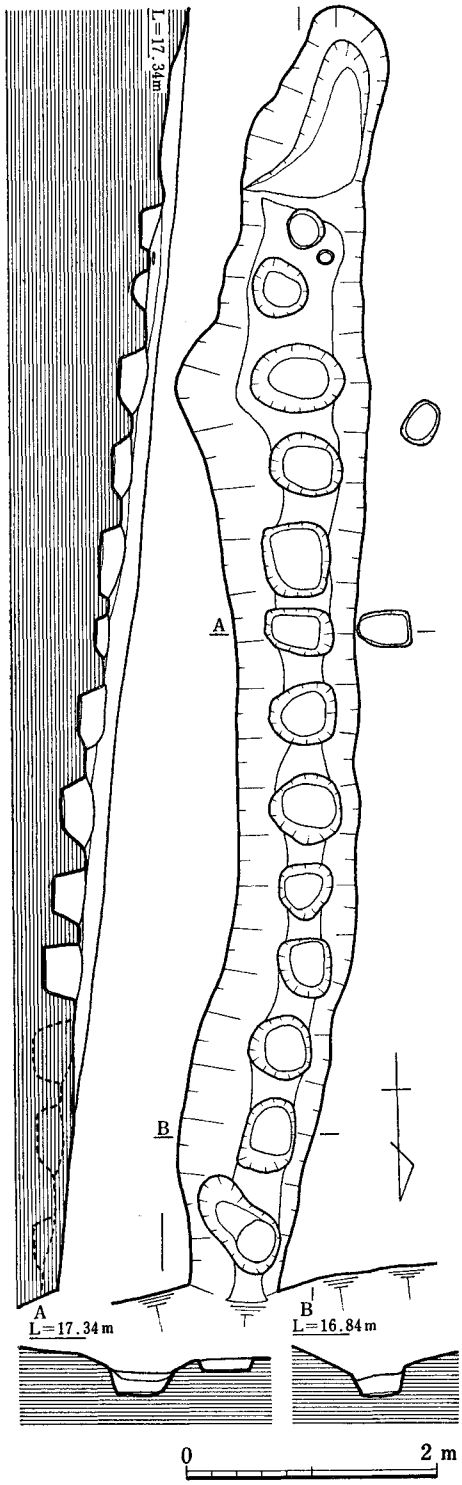


Fig. 5　柵状遺構実測図（縮尺1/60）

約7度でほぼ等間隔に不整円形のピットが掘られており13個を数える。ピットの大きさ，深さともに一定しないが，横断面で見れば，逆台形状の溝を掘った後，その溝底に円形のピットが掘られたものと思われる。現況は，やや階段状に近いが，上面が削平されていることを考慮して柵状遺構と推測された。遺物は，覆土より須恵器（S－4）が出土した外は，時期を決定しうるような遺物は検出されなかった。調査期間の時間的制約からⅡ区の拡張はできず，つぎにⅢ区の発掘調査に移動したために，柵状遺構という呼称の妥当性，さらには，どのような遺構に対しての構築であったのかは現状では断定できない。

出土遺物

石 製 品（Fig. 6）

全長4.5㎝，幅2.4㎝，厚さ0.9㎝の大きさで，一部に欠損が見られるが完形の磨製扁平片刃石斧である。基部を含む全面に研磨が施されており，刃部は先端より1㎝の部分に約30度の角度をもって片面よりつけられている。図裏面は平坦であるが刃部先端でやや上がりぎみとなり尖った刃先をつくっている。扁平片刃石斧としてはきわめて小型の部類に入ろう。砂岩質の石材が用いられている。

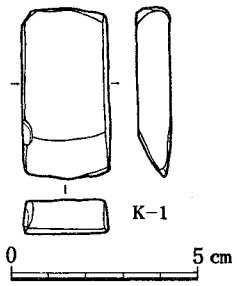


Fig. 6　Ⅱ区出土石器実測図（縮尺½）

須 恵 器（Fig. 7）

S－4は坏蓋で全形の½の破片で天井部を欠くが，ほぼ復原できる。口径は11.4㎝，器高は3.4㎝。天井部の回転ヘラ削りは½程を占め，その1単位の幅はせまく，天井頂部は平坦をなす。稜部は水平に突出し，やや開きぎみの口縁部が続く。口縁端内面には明瞭な段がある。胎土，焼成とも良好で，内外面とも青みをおびた黒灰色を呈す。ロクロの回転は逆時計まわりのようである。

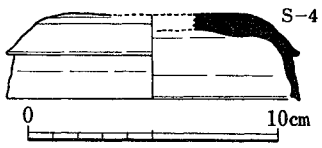


Fig. 7　柵状遺構出土須恵器実測図（縮尺⅓）

5　Ⅲ区の調査（PL. 6）

Ⅲ区は，南区長丘から西区干隈に通じる幅15 m の道路が建設される部分にあたり，またⅠ区，Ⅱ区の発掘調査知見から，標高約15m程で最も下段にあるⅢ区は，遺構の残存している可能性が大であり，Ⅱ区で検出した柵状遺構の性格究明からも，Ⅱ区とⅢ区との間にある崖面をも含む全面の発掘調査が必要となった。柵状遺構の北端については，先にも記したごとく崖面上で終っており，その北端部とⅢ区崖面下とは，約1 m程の比高差がある。

出土遺構

Ⅲ区検出の2条の溝状遺構と4軒の住居跡は，その検出順序から第1，2号溝，第1，2，3，4号住居跡と呼称した。

第1号溝　(Fig. 8)

第1号溝は，Ⅱ区とⅢ区との間の崖面下において，幅約1.5～2 m，長さ約22mにわたって検出したもので，その崖面にそってゆるやかに彎曲しながら東西にのびているが，Ⅱ区の柵状遺構の北端下付近が最も高く，東西に向かって次第に深さを増している。検出部における最深部は西側端であるが，溝上面との差は約30cm程でかなり浅い。溝斜面の掘り込みも明瞭でなく，遺物も須恵器，土師器，陶磁器などの小破片が混存して出土しており，意図的に掘られた溝というよりも，むしろ崖面下のために雨水などによる自然的な結果の溝と考える方が妥当性があるのではなかろうか。

第1号溝出土遺物

出土遺物量はきわめて少量で，かつ小破片であったために図化しえたのは陶磁器6点のみであった。

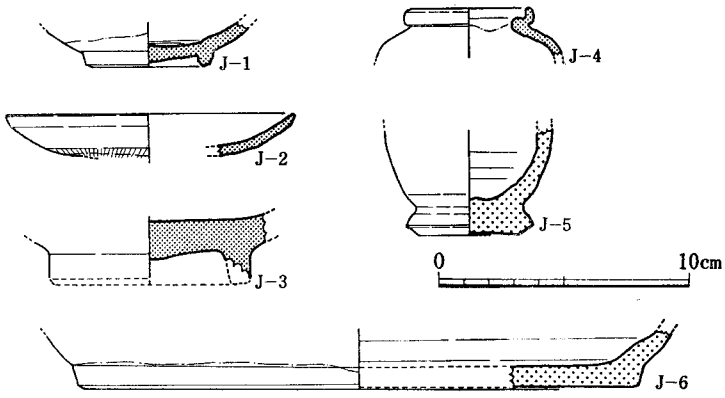


Fig. 8　第1号溝出土遺物実測図（縮尺⅓）

磁　　器

J－1は，削り高台を持つ白磁碗である。高台径5 cm，高台高6 mmあり，高台の削り出しは粗雑で，体部との境に小さな段がある。畳付は水平でなく高台脇は露胎である。釉は淡緑色をおびた灰白色を呈し見込内底は輪状に施釉されていない。J－2は，底部を欠いているために高台の有無は不明であるが，白磁の皿である。底部より大きく外に開きながら尖りぎみの口縁へと続くが，途中3か所で内側に屈曲する。釉は灰白色を呈し，底部は露胎でありこの部分には櫛目状文が認められる。体部，見込ともに文様は見られない。施釉された部分には貫入がある。口径は11.4cm。J－3は青磁碗の底部で削り高台であるが欠損のため高台径，高さともに不明。釉は暗緑色を呈しかなり厚くかけられている。高台内は露胎で赤銅色を呈する。J－4は口辺部を残すのみで全形を知りえないが長胴の壺形をなすものと思われる。口辺部は折り返され，さらに内傾ぎみに直立する。釉は淡緑色で，胴部内面には施釉されない。口径4.8 cm。J－5は暗茶褐色胎土の陶器で体部上半を欠く。厚手の底部に内彎しながらのびる胴部がつく。釉は白黄色をおびた暗茶褐色を呈し，底部上面までかけられる。

底部は回転糸切りの手法が見られる。底径４㎝。Ｊ－６は復原底径23.4㎝のかなり大きい底部でやや凹状をなす。底部端は鋭い面取りが行なわれている。釉は内面が黄緑色で細かな貫入が見られる。外面は黄黒色釉で底部は露胎である。胎土はＪ－５と同じように陶土を用いているがより精良であり，焼成もよい。

第２号溝　(Fig. 9　PL. 7)

第２号溝は，Ⅲ区のほぼ中央部でその西南端を検出したもので，幅と深さを増しつつ，やや北へ彎曲しながら北東方向へのびている。この溝の延長部は，宅地造成ですでに削られているために北東方向への発掘は不可能であるが，発掘によって全長約12ｍを検出した。幅，深さともに最も大きい北東端部では，幅約５ｍ，深さ約48㎝を計る。溝に堆積している土層は次の５層に分けられる。Ⅰ層は濃い褐色粘質細砂礫土。Ⅱ層は褐色粘質細砂礫土。Ⅲ層は黄褐色粘質土。Ⅳ層は褐色バイラン粘質土。Ⅴ層は黄褐色バイラン粘質土である。遺物はすべての層に包含されているが，Ⅰ層は近世の白磁片が出土しており，畑耕作による攪乱をかなり受けているようである。ⅡⅤ層までは須恵器と土師式土器のみで大きな攪乱はないようであるが，出土遺物における時期差と層位とは明瞭に一致しない。第２号溝出土遺物には，第１号住居跡の覆土中より出土した高坏(Ｓ—28)と接合するものがあり，また住居跡に添って掘られ北に向って彎曲するかのようであり，住居跡群をとり囲む周溝というような関連も考えられようが，残存部のみではそれを積極的に肯定する資料を欠いている。

第２号溝出遺物

須恵器（Ｓ－５，６）

Ｓ－５は蓋のつまみ部の小破片である。つまみは，ほぼ水平な天井部に貼りつけてあり，その中央は凹状で左右へのはりは，あまり鋭くない。胎土は灰白色を呈しており砂粒の含有は少ない。内外面とも灰色を呈しており焼成は良好である。つまみの径は2.5㎝である。Ｊ－６は高台付坏で体部のほとんどを欠いており，底部残存部も全形の¼にも満たない小破片である。復原径9.6㎝を計る高台は，回転ヘラ削りをした坏底部に貼りつけられており，その後回転横ナデを加え接合している。高台端はやや外に突出しているが，丸みをもっている。胎土，焼成とも良く，内面は淡灰色，外面は灰色を呈している。

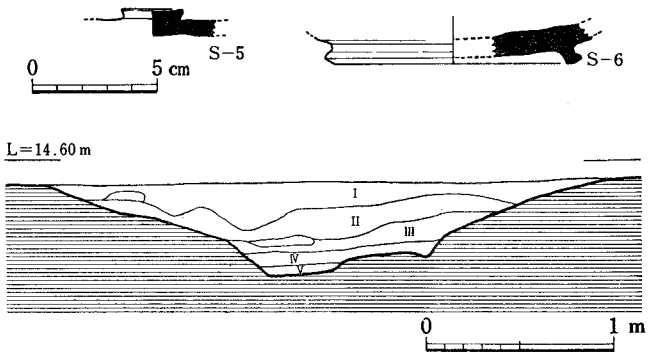


Fig. 9　第２号溝出土須恵器実測図（縮尺⅓）と第２号溝土層断面図（縮尺1/40）

住 居 跡

Ⅲ区の発掘で検出した住居跡は計4軒で，第1号から第4号までの名を付したが，番号は住居跡相互の時期差を示すのではなく，単に検出順序を示すにすぎない。これら4軒の関係は，第1号住居跡が第2号住居跡を切り，第4号住居跡が第3号住居跡を切っている。第2～4号住居跡はいずれも宅地造成によってその一部分を削られており，完全な姿をとどめるのは第1号住居跡のみであり，第3号住居跡にいたっては，わずかに壁のコーナーを残すにすぎない。以下各住居跡について記すが，壁の呼び方は Fig.10 のごとく，各住居跡の2つのコーナーが南北の位置にあることから北壁，南壁とはせず，北のコーナーより時計まわりでA，B，C，D壁と呼ぶことにする。また住居跡内のピットについてもこれに準じてP－1，2……とした。

第1号住居跡　(Fig.10　Tab.2　PL.8, 9)

Ⅲ区の現況は北西方向に傾斜しているために，南西側のB壁がもっとも保存状態がよく床面よりの高さは約45㎝程ある。各壁の長さはコーナー間を計測したが表に示したごとくB壁がやや長いが，ほぼ正方形プランの住居跡である。住居内には，5個のピットがあるが主柱穴と思われるのはP－1～P－4の4個で，各ピット間の長さも壁に比例しておりP－4からP－1間が最も長い。P－1～P－4の床面からの深さは，60㎝～72㎝であまり差はない。P－5は深さが23㎝と浅く柱穴とは考えがたい。かまどはD壁の中央につくられているが，土圧と耕作の為に著しく変形している。壁溝はB壁，C壁に見られ，A壁とD壁とでは途中切れており全周しない。しかし，この部分が第2号住居跡の上にあたり，地山と同じ黄褐色土を薄く貼っているために明瞭さを欠いていたためであり，おそらく全周するのであろう。床面は，わずかながらD壁に向かって傾斜しており，第2号住居跡とは Fig.27 のごとく切り合っているが，重複した部分のみだけでなく，重複していない部分も同じような土を貼っているようである。住居内のほぼ中央に小児人頭大程の石が炉のように置かれているが，床面より約20㎝程高く，また焼土なども認められないことから，第1号住居跡に伴う遺構とは断定できない。

遺物は，須恵器，土師式土器，紡錘車，砥石などであるが，これらのほとんどは覆土中からの出土である。かまどからは，土師式土器は甕形土器(H－3)，鉢形土器（H－9）と甑（H－12)，須恵器は坏身(S－25）が置かれたような状態で出土した。床面からは，甑(H－11)，甕形土器（H－10）の土師式土器。坏蓋（S－10，13）の須恵器。さらには壁溝からは，高坏形土器(H－7)，手捏ね土器（H－5）の土師式土器，小型短頸壺（S－38）の須恵器が出土しており，これらは第1号住居跡に伴う遺物と判断される。焼土がH－11の甑出土付近にわずかに見られるが，貯蔵穴や張出部などの施設は，住居跡の内外にも存在しない。

主柱穴と思われるP－1～P－4は，相対するコーナーを結ぶ対角線上に位置しており，ほぼ長さの等しい各壁や柱穴間の距離などは，きわめて数値的に計画構築されたことを思わせる。

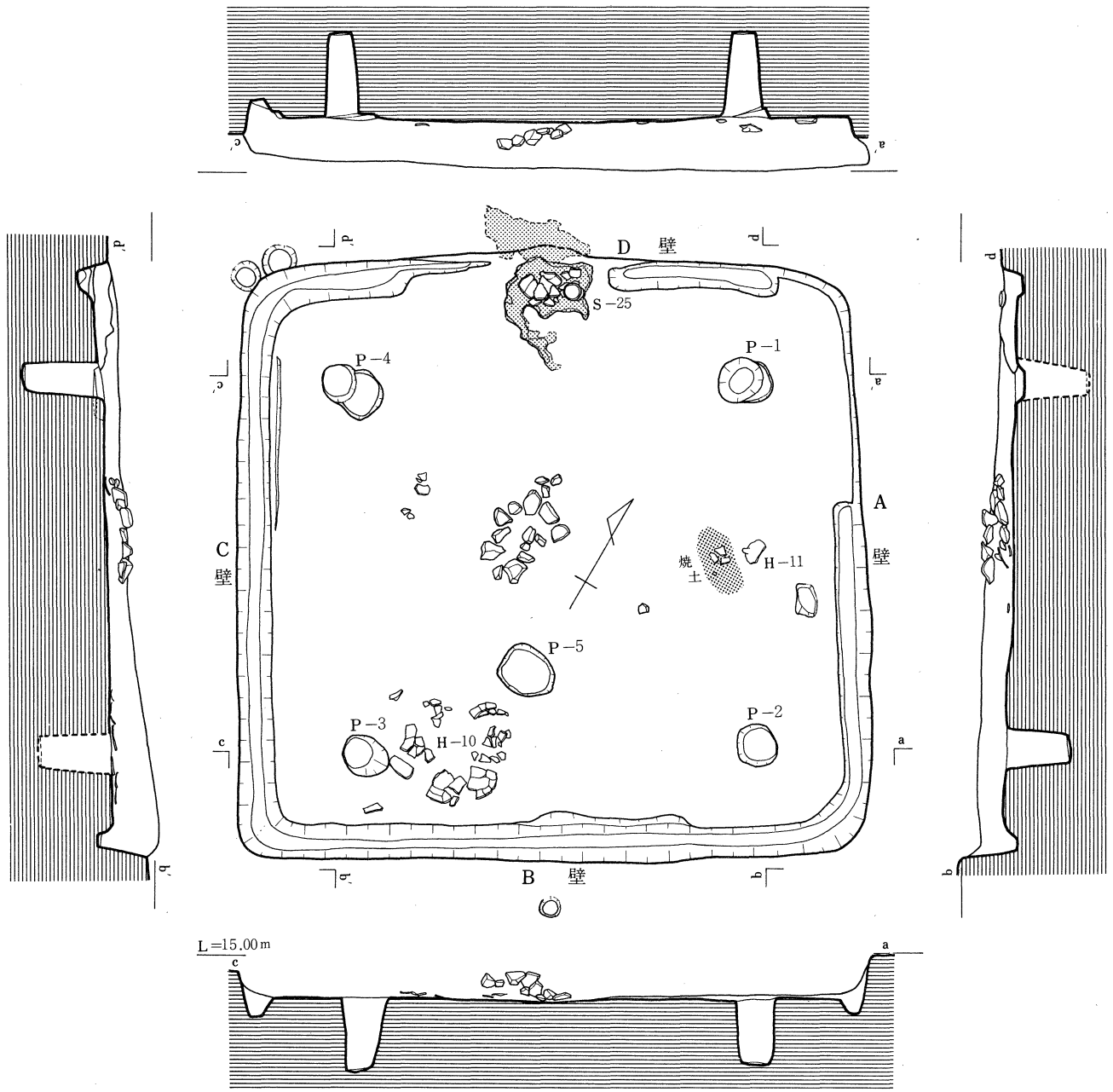


Fig. 10　第 1 号 住 居 跡 実 測 図（縮尺 1/60）

Tab. 2　第 1 号 住 居 跡 計 測 値 表　　（単位 cm）

平面プラン	壁長 A壁	B壁	C壁	D壁	住居内ピット数	P−1 径：深さ	P−2 径：深さ	P−3 径：深さ	P−4 径：深さ	P−5 径：深さ	P−6 径：深さ	壁溝	かまど	出土遺物 須恵器	土師器	その他	かまど 長さ	最大幅	焚口幅	高さ	総床面積
長方形	510	560	535	540	5	50×40：70	42×38：60	45×35：72	45×33：69	65×44：23	——	A〜D	D	S−7	H−1	紡錘車	45	75	不明	15	22.95㎡
床面長	460	500	475	500		柱間 350	375	350	P−4〜P−1：380				壁	〜S−39	〜H−12	砥石					

第1号住居跡の出土遺物

須恵器（Fig. 11～13　Tab. 3　PL. 10, 11）

第1号住居跡より出土した須恵器は，覆土中のも含めて坏蓋，坏身，高坏，甕，壺，甕の器種があり，出土位置，法量，形態・手法の特徴，胎土，焼成などは Tab. 3 に示したごとくである。

坏蓋（S－7～16）

図示した10点のうちS－8のみを除いては，ほとんどが復原実測であり口径などの法量にはやや正確さを欠くことは免れないが，形態，手法，胎土，焼成などの諸特徴から**A類**（S－7），**B類**（S－8～13），**C類**（S－14，15），**D類**（S－16）の4類に分類した。

A類は，S－7の1点のみであるが，平坦ぎみの天井部にほぼ直立する口縁部がつき，口縁端は，微妙に外に開き内面には段を持っており，特に稜部が小さく突出するなど，B類とは明らかに異なる特徴を持っている。**B類**は，天井部が丸みをおび，口縁部は長いが内彎しながら外に開く。口縁端内面の段は残っているが，稜部の突出する特徴は失なわれ，凹線（沈線）がめぐり天井部と口縁部の境をなす。**C類**は，B類の口径と大差ないが器高が低くなり扁平な器形をなす。天井部と口縁部との間の凹線はB類と同じであるが，鋭利さを欠く。口縁部は直立ぎみであるが，短く口縁端内面の段もにぶい。**D類**は，S－16の1点のみである。天井頂部を欠くが，丸みを欠き山形をなすものと思われ，口縁部への移行も鈍角に屈曲して外に開き直線的にのびるなどA～C類とは大きくその器制を異にしている。

坏身（S－17～27）

坏身は，坏蓋と対になって出土したものはない。坏身は坏蓋のように形態的には顕著な差はないが，立ちあがりの特徴などによって**A類**（S－17～20）と**B類**（S－21～27）に分類した。

A類は，丸みのある底部に水平な受部がつき，立ちあがりは直線的に内傾する特徴を持っているが，立ちあがりのみを見れば，直線的にのびるS－15・16と外彎ぎみにのびるS－17・18の2つに分けられる。**B類**は，底部の丸みがなくなる傾向にあり，受部は水平でなくやや上向きである。立ちあがりは，内傾するが直線的でなく外彎ぎみであり，立ちあがり上端で，さらに小さく外反し丸くおさめている。S－25は，かまどに置かれた状態で出土したもので，受部の特徴からB類としたが，立ちあがりを欠いているために断定できないが，丸みのある底部からすれば，むしろA類とすべきであろうか。

高坏（S－28～35）

図化しえた高坏は8点であるが，完形品はなく全形を知りうるものはない。これらの高坏は形態の特徴により**A類**（S－28），**B類**（S－29），**C類**（S－30～34），**D類**（S－35）の4類に分けうる。

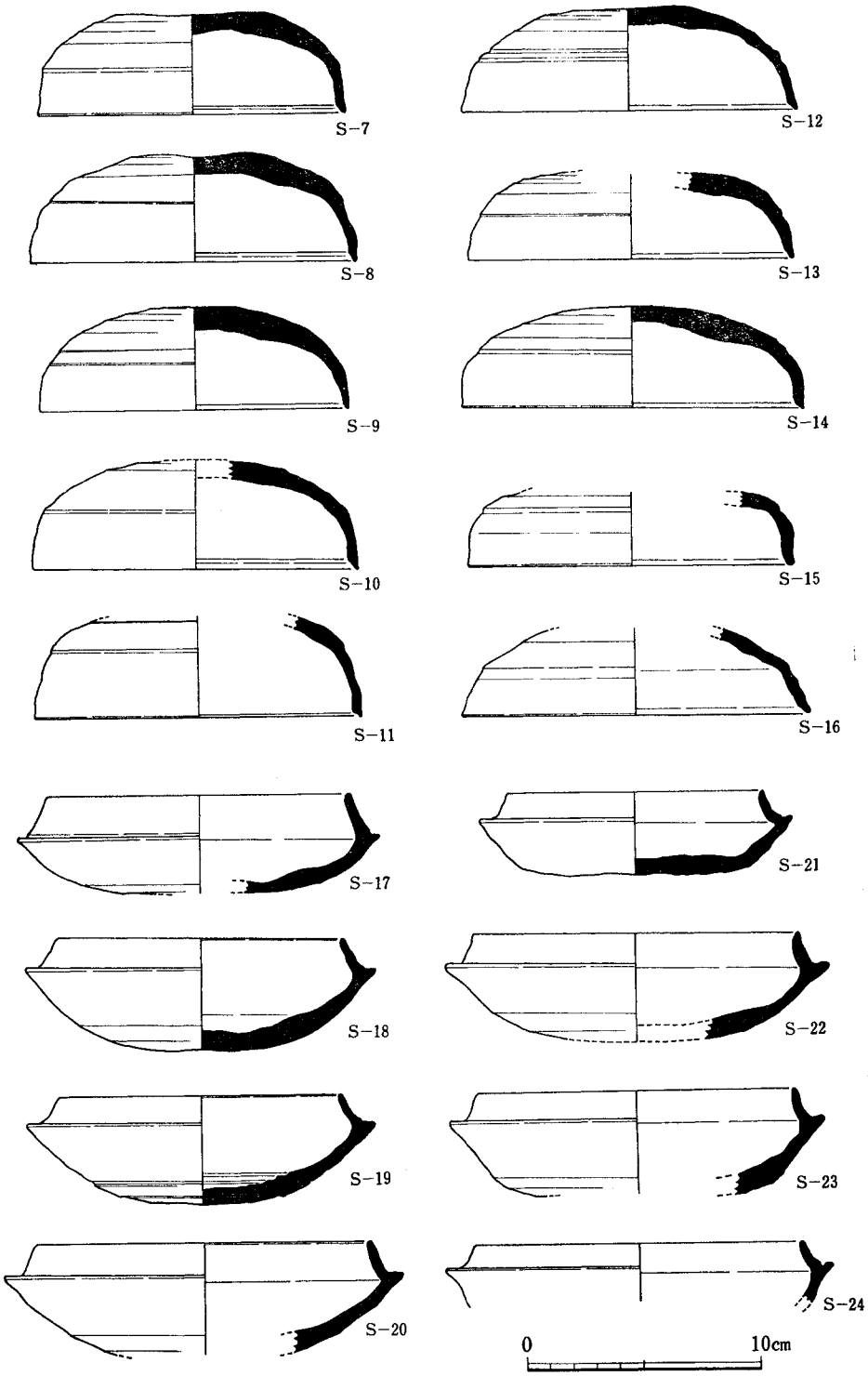


Fig. 11　第１号住居跡出土須恵器実測図（１）（縮尺⅓）

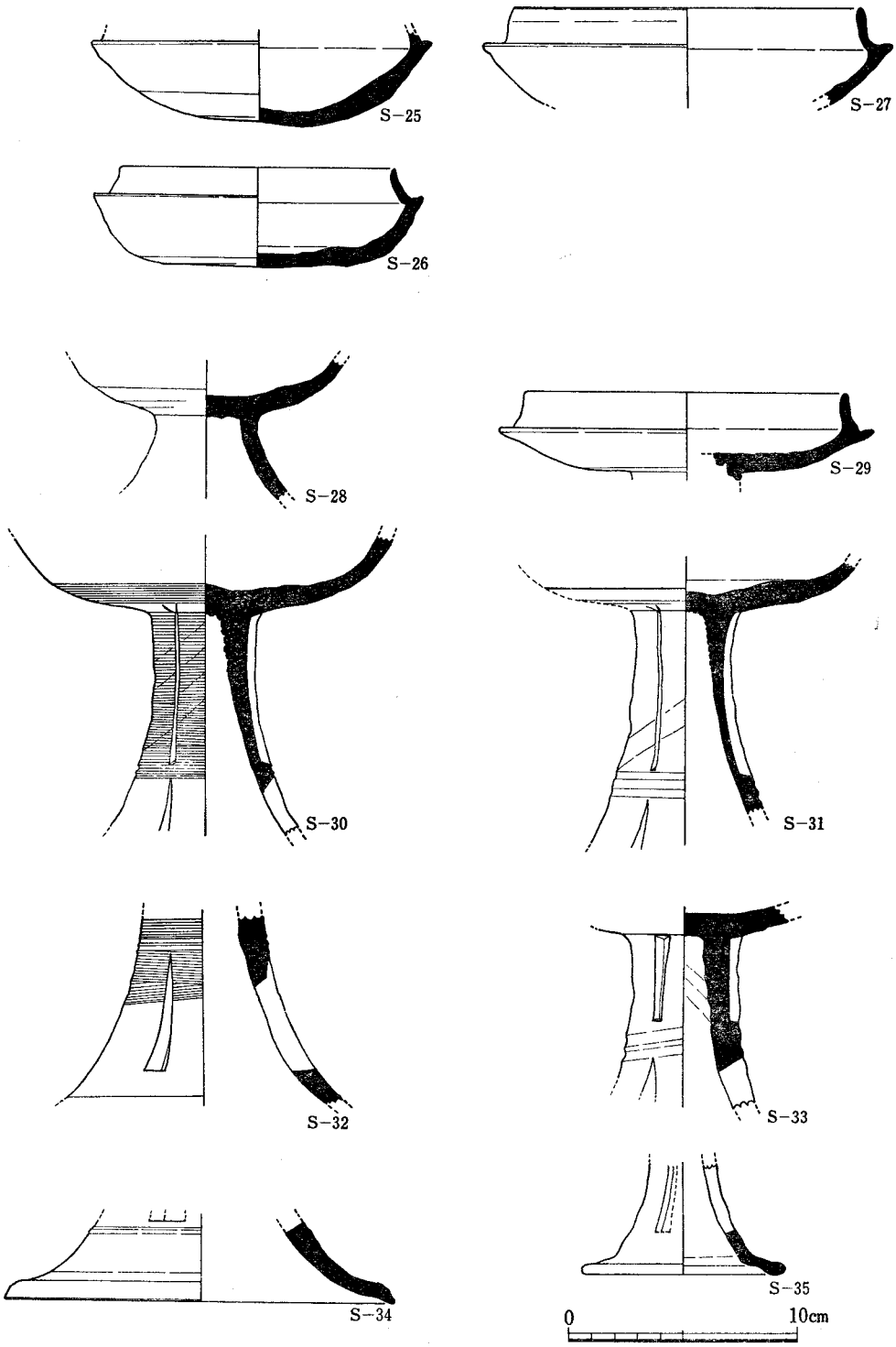


Fig. 12　第１号住居跡出土須恵器実測図（２）（縮尺⅓）

A類のS—28は，脚部が第2号溝からの出土である。脚部は，柱状をなさず坏部との接合部より裾部へ向けて大きく開いている。脚残存部には窓が開けられた形跡はない。坏部は上半分を欠いているために有蓋の高坏であるかは不明。**B類**のS—29は，坏部のみで脚部を欠くが，脚部との接合部より割れており，接合方法をよく知ることができる。坏部の受部，立ちあがりは，坏身B類の特徴を持っているが，立ちあがりはより直立し，深さも浅いようである。**C類**は，S—30〜34の5点で，有蓋高坏の可能性もありB類と区別すべきでないかもしれないが，完形品でなく，B類の脚部が明らかでないことからC類として区別した。S—30〜33の脚部は坏部接合部より，ゆるやかに外に開き裾部をつくるが，その中位程に2条の凹線があり，その上下3方に窓を持っている。上の窓は坏部接合後に入れられていることが坏部に傷があることから観察でき，すかし窓にはなっていない。下の窓は3角形ですかし窓となっている。手法的には，S—30，32には，脚柱状部にカキ目が見られ，S—31，33にはない。また上の窓は，S—30，31が長く，S—33は短い。これはS—33の脚柱状部が短く，低い脚高をなすからであろう。**D類**はS—35の1点で，すかし窓を3方に持ち裾端部は丸みを持っている。脚部の大きさからいって小型の無蓋高坏であろう。

甕（S—36，37）

S—36は，口縁部を欠く。頸部と球状部の下半にはカキ目を入れている。S—37は，頸部，口縁部ともに欠いている。球状部はS—36に比し肩がはり，凹線を入れて鋭い段をなしており，カキ目は施されないが，下半部はヘラ削りであり，肩部には斜行文を篦で入れている。いずれも球状残存部には孔が認められないが甕であろう。

壺（S—38）

小型の壺で，B壁の壁溝より手捏ね土器（H—5）と並んで出土した。肩のはる胴部にやや内傾する直線的な短い頸部がつく。肩部には，ヘラ記号がつけられている。焼成時には蓋が被せられていたことが外面の色調よりうかがわれる。

甕（S—39）

S—39は，朝顔状に大きく開いており，外面には櫛目波状文が施され，その下に沈線がめぐっている。この外にも接合復原できなかったが，多量の甕破片が出土しており，これらのほとんどは，内面に青海波叩き目文，外面に平行叩き目文が見られる。

土師式土器（Fig. 14　Tab. 4　PL. 11）

図化しえた土師式土器は12点で須恵器に比して⅓強であるが，この数字が須恵器の出土量との比を示すものではない。確かに土師式土器の出土量は少ないが，磨滅しており接合復原が不可能で実測にたえるものが少なかったことが最大の原因であり，このことは，第2〜4号住居跡にも共通して言えることであった。

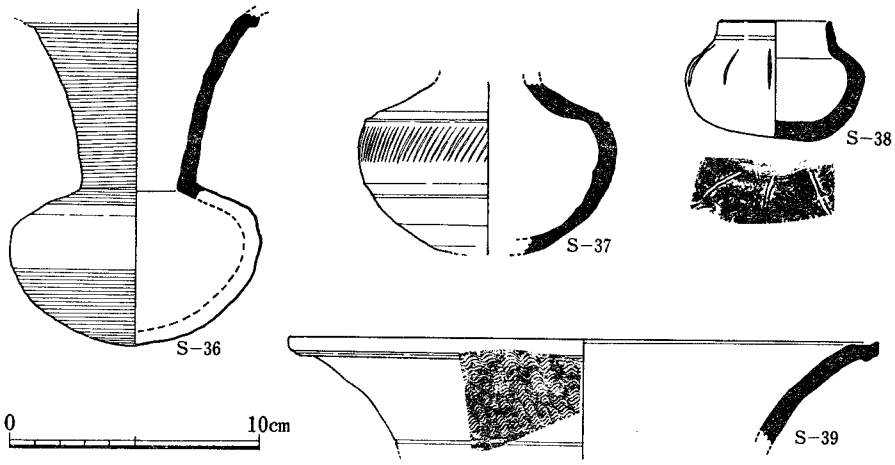


Fig. 13　第１号住居跡出土須恵器実測図（３）（縮尺⅓）

甕形土器（H－１～３，10）

H－１は，やや肩のはる胴部に外反しながらのびる口辺部がつき，口縁端になってさらに小さく外反する。H－２も，同じような口径であるが胴部から口辺部への彎曲が大きくなる。H－３は，かまどより出土したもので，直立ぎみの口辺部をもつ。H－10は，口径32.2㎝と大きく，胴部の接合復原できなかったが，内面に青海波叩き目文を残している。

手捏ね土器（H－４，５）

H－４は，全体的に器壁厚いつくりで，口辺部を欠くが壺形をなすのであろうか。H－５は，埦形の土器で外面の整形は粗雑であるが，内面は口縁部を横ナデするなど丁寧な調整である。

高坏形土器（H－７，８）

いずれも坏部を欠き脚部の破片である。H－７とH－８は，同一個体ではなく接合しないが２つで脚部の形態が推察しうる。

鉢形土器（H－９）

H－９は，かまどからの出土で37.4㎝と大きい口径をなす。半球状の胴部にゆるやかに外彎し開く口辺部がつく。器形の大きさに対して器壁は薄いつくりをなす。

甑（H－11，12）

H－11は，口辺部と底部を欠き把手部が残る。把手は粘土の接合状況から見て挿入式のようである。H－12は，逆に把手部を欠く。H－11に比し器壁はかなり薄く，把手は挿入式接合によっていることが明瞭にうかがわれる。

用途不明土器（H－６）

朝顔状の器形をなし漏斗状をなす。胎土，焼成などには他と特別に異なる点は指摘できない。

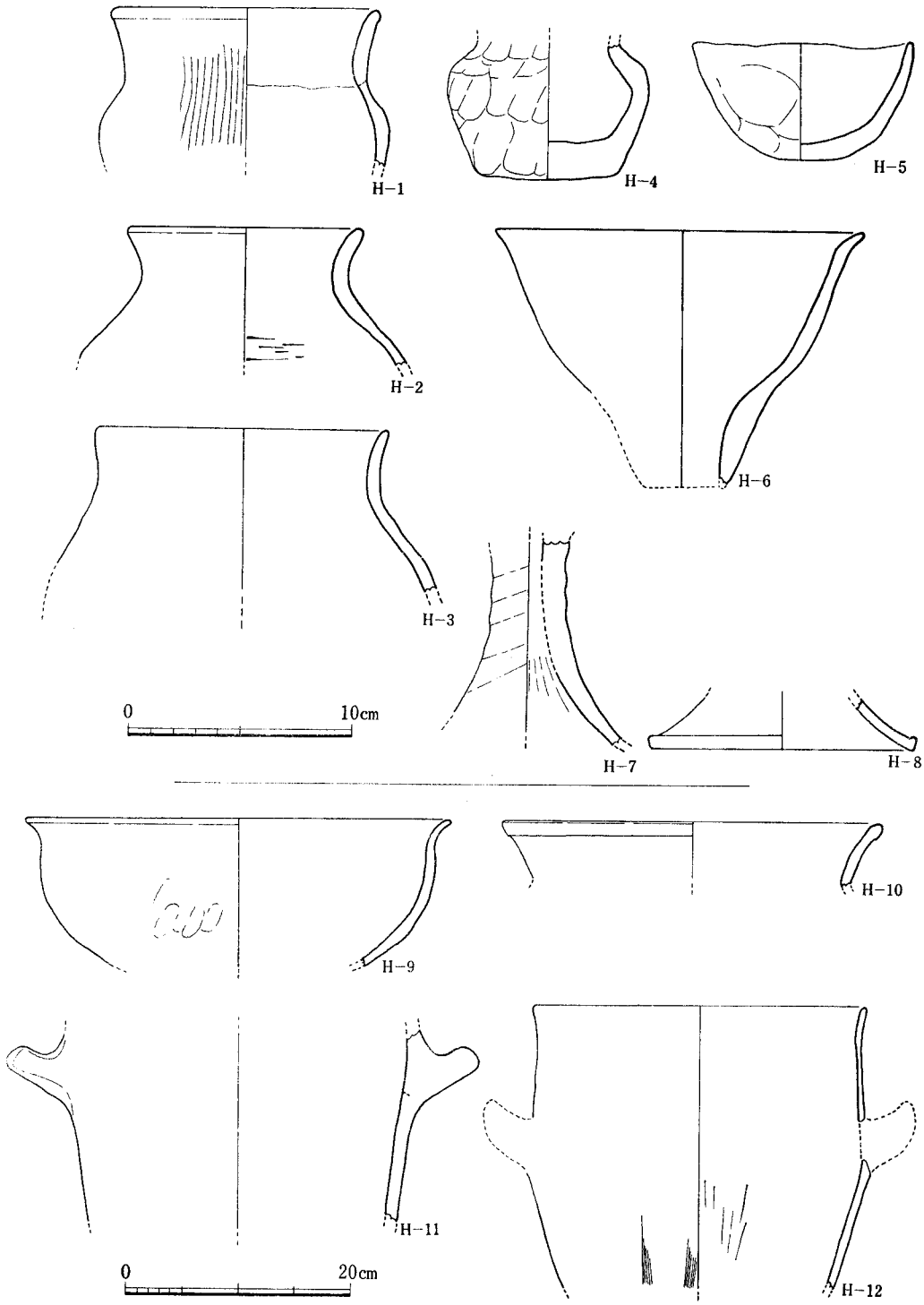


Fig. 14　第１号住居跡出土土師式土器実測図（縮尺⅓・⅙）

Tab. 3　第1号住居跡出土須恵器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考（ロクロ回転）	Fig.	PL.
S-7	覆土	坏蓋	残存部は全形の⅝	口径 13.0 器高 4.3	稜部はわずかに突出し、口縁部は直線的でやや外反する。	天井部は⅔程を篦削るが頂部は施されない。口端内面ににぶい段を持つ。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	11	10
S-8	覆土	坏蓋	口縁部をやや欠くがほぼ完形	口径 14.0 器高 4.5	ごく浅い沈線がめぐり天井部と口縁部をわける。天井頂部は凹状。	天井部の調整法はS-5に類似するが口縁端部内面はさらににぶくなる。	やや砂粒	普通	内外面 灰色	順時計回転	11	10
S-9	覆土	坏蓋	全形の½を欠く	口径 12.2 器高 4.4	天井部は丸みをおび、口縁部との沈線は浅く一周しない。	口縁端部内面にはわずかに段の形跡をとどめる。	やや砂粒	普通	外面 灰黒色 内面 灰色	順時計回転	11	10
S-10	床面	坏蓋	全形の½を欠く	※ 口径 14.0	稜部はわずかに突出する。口縁部は長く、わずかに外傾する。	天井部の篦削りは⅓程に施されるのみ。口縁端部は丸みをおびる。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	11	10
S-11	覆土	坏蓋	天井部を欠き全形の⅙の破片	※ 口径 14.2	稜部にあたる部分には浅い沈線がめぐり、長めの口縁部へと続く。	口縁端部には明瞭な稜はないが、角度を持っており、凹状を呈する。	良	普通	外面 黒灰色 内面 灰色	回転不明	11	
S-12	覆土	坏蓋	全形の½を欠く	口径 14.4 器高 4.4	天井部丸く稜部にあたる部には2条の沈線があり、口縁部は外傾する。	篦削り部は天井部の⅔以上を占める。天井頂部内面はナデ調整。	やや砂粒	普通	内外面 灰色	順時計回転	11	10
S-13	覆土 床面	坏蓋	残存部は全形の¼	※ 口径 14.0	稜部わずかに突出する。口縁部高は低く外傾する。	天井部の篦削りは⅔以上を占める。口縁端部は細く丸みをもつ。	良	良	内外面 灰色	順時計回転	11	
S-14	覆土	坏蓋	全形の½を欠く	※ 口径 14.8 器高 4.4	口縁部内弯し高さも低く扁平な形を呈する。	口縁端部内面はかなり鋭角で稜線を持つ。	やや砂粒	普通	内外面 灰色 一部に黒灰色	順時計回転か？	11	10
S-15	覆土	坏蓋	天井部を欠き残存部は⅙の破片	※ 口径 13.8	口縁部と天井部の境には、幅広の沈線がめぐる。天井部は平坦か？	口縁部の中位でやや稜を持ち、端部は丸みがあり内面にわずかに段を持つ。	良	普通	内外面 黒灰色	回転不明	11	
S-16	覆土	坏蓋	全形の⅙の破片で天井部を欠く	※ 口径 14.8	口縁部は天井部と鈍角をなし、直線的にのびている。	天井部の⅔程が篦削り。口縁端部内面にわずかに段を持つ。	良	普通	内外面 黒灰色	回転不明	11	
S-17	覆土	坏身	全形の⅔を欠く	※ 口径 13.0	細めの受部はほぼ水平にのび、立ちあがりは直線的に内傾する。	底部の篦削りは½程度底部内面はナデ調整。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	11	
S-18	覆土	坏身	全形の⅓が欠損する	※ 口径 12.2 器高 4.8	S-17と形態差はあまり見出しえない。	底部の篦削りは½を占める。立ちあがりはかなり直線的にのびる。	良	不良	内外面 白灰色	順時計回転	11	10
S-19	覆土	坏身	全形の½を残す	※ 口径 11.8 器高 4.9	丸みを持つ底部に水平な受部がつく。立ちあがりは細く内傾する。	底部内面には叩き痕が認められる。底部の篦削りは½を占める。	良	不良	内外面 白灰色	回転不明	11	10
S-20	覆土	坏身	全形の⅙の破片	口径 14.2	受部ほぼ水平で端部は丸い。立ちあがりはやや短い。	受部の焼成色から蓋を被せて焼いたことが観察される。	良	普通	底部外面 灰黒色 その他 灰色	回転不明	11	
S-21	覆土	坏身	全形の⅓を欠損	※ 口径 11.0 器高 3.5	焼成時の変形著しく、底部平坦となる。立ちあがりの弯曲大きい。	底部の篦削りは½を占める。この他は回転横ナデによる調整。	良	普通	内外面 灰黒色	順時計回転	11	
S-22	覆土	坏身	全形の¼の破片	※ 口径 14.0	立ちあがりは内傾するが端部で直立する。	立ちあがり、受部とも厚めのつくりをなす。	良	普通	内外面 灰色		11	
S-23	覆土	坏身	立ちあがり部の⅓が残存	※ 口径 13.4	底部は篦削り部で大きく屈曲し平坦な底部をなすのであろう。	内傾する立ちあがりは中位で屈曲し直線的となる。	砂粒	普通	内外面 淡灰色	回転不明	11	
S-24	覆土	坏身	立ちあがり部の¼を残す	※ 口径 14.0	立ちあがりは内傾し、中位でやや上方に屈曲する。	立ちあがりと受部との間には沈線がめぐる。	良	普通	底部外面 黒灰色 内面 灰色	回転不明	11	
S-25	かまど	坏身	立ちあがりを欠く	受部径14.9	底部丸く、受部は小さくその端部は丸い。	焼成不良で調整痕不明であるが、底部の篦削りは½程度に施される。	良	不良	内外面 白灰色	回転不明	12	10
S-26	覆土	坏身	全形の½を欠く	※ 口径 12.0 器高 4.3	底部篦削り部より平坦となり、ほぼ同じ厚さをなす。	立ちあがりは内傾し、端部でやや外反する。底部に篦記号あり。	砂粒	普通	内外面 黒灰色	順時計回転	12	10
S-27	覆土	坏身	立ちあがり部の⅓が残存	※ 口径 15.0	受部端は丸くやや上向きで立ちあがりはほぼ垂直にのびる。	残存部では篦削りは認められない。	良	普通	底部外面 黒灰色 その他 灰色	回転不明	12	
S-28	覆土 第2号溝	高坏	坏、脚裾部の大部分を欠く	基部径 4.6	脚部は第2号溝からの出土。脚は柱状をなさず裾部の開きが大きい。	坏部の篦削りは底部の⅓程を占める。他は回転横ナデ。	砂粒	普通	内外面 灰色	順時計回転	12	

S－29	覆　土	高坏	脚裾部を欠き、坏部も¼のみ	口径　14.0 ※	長めの受部に直立ぎみの立ちあがりがつく坏部でやや浅い。	脚部との接合部で割れており、接合法をよく示している。坏部内面に叩き痕。	良	普通	内面　淡灰色 外面　灰　色	順時計回転	12	
S－30	第1・4号住居跡覆土	高坏	坏部は⅓、脚部は裾部を欠く	基部径 4.8	脚柱状部長く2条の沈線を間にして2段の窓を持つ。	上段の窓はすかしではない。坏部と脚柱状部にはカキ目が施される。	良	普通	内外面　灰色 外面一部が灰黒色	坏部は順時計回転	12	11
S－31	覆　土	高坏	坏部、裾部の大部分を欠く	基部径 4.9	脚柱状部の長さ、上下2段の窓と2条の沈線などS－29と大差ない。	脚柱状部と坏部にカキ目が施されないことをのぞけばS－30に類似。	良	普通	内外面　灰色 外面一部が灰黒色	回転不明	12	11
S－32	覆　土	高坏	坏部、裾部を欠く	基部径 5.2	脚柱状部で2段の窓を持つが上段のそれはすかしではない。	窓は3か所に見られ上下窓の間には2条の沈線がめぐる。	良	普通	脚部　灰黒色 一部が淡灰色を呈する	回転不明	12	
S－33	覆　土	高坏	脚裾部⅓の破片	――	脚柱状部から朝顔状に開く部分ですかし窓が3か所にあったのであろう。	すかし窓は三角形でその上方には2条の沈線がめぐる。	砂粒	普通	内面　青灰色 外面　灰　色 一部　灰黒色	回転不明	12	
S－34	覆　土	高坏	裾部で⅙の破片	基底部計 17.0 ※	すかし窓の下部が見られるにすぎずその下に浅い2条の沈線がある。	すかし窓は三角形であろう。裾端部は尖りぎみになる。	良	普通	内面　淡灰色 外面　黒　色	回転不明	12	
S－35	覆　土	高坏	脚裾部で⅓の破片	基底部径 9.0 ※	裾端部は丸みを持っており3か所にすかし窓を有するようである。	破片のためすかし窓の全形不明。	良	普通	内外面　灰　色	回転不明	12	
S－36	覆　土	甕	口縁部と胴部の一部を欠く	胴部最大径 10.0	口縁部を欠くが、ゆるやかに外反する頸部に朝顔状の口縁がつくのであろう。	胴部最大径部をのぞきカキ目が施されている。残存部には孔は見られない。	良	普通	内外面　灰　色	順時計回転	13	11
S－37	覆　土	甕	胴部¼の破片	胴部最大径 10.4 ※	残存部には孔がないが甕であろう。	最大径部に篦で斜行文をいれ肩には鋭い段を持つ。	良	普通	内面　淡灰色 外面　灰　色	順時計回転？	13	
S－38	壁　溝	壺	完　形	口径　4.5 器高　4.8	やや肩のはる胴部に、内傾ぎみの短い頸部がつく。	外面の色から蓋を被せて焼成されたことが知られる。	良	普通	内面　灰　色 外面　灰黒色	回転不明	13	10
S－39	覆　土	甕	口縁部⅙の破片	口径　23.6 ※	朝顔状に開く口縁で端部外面に丸みを持つ稜がある。	内面回転横ナデ。外面に櫛目波状文が施されその下部に沈線がめぐる。	良	普通	内面　灰　色 外面　暗灰色	順時計回転	13	

Tab. 4　第1号住居跡出土土師式土器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
H－1	覆　土	甕	口辺部の⅓を残す	口径　11.6 ※	肩のはる胴部にゆるやかに外傾する口辺部がつく。	口辺部内外面とも横ナデ後ナデ。胴部外面は上下の刷毛の後に横ナデで消す。	砂粒	普通	内外面　茶褐色	14	11
H－2	覆　土	甕	口辺部の⅓程を残す	口径　10.0 ※	口辺部はゆるやかに「く」の字形に外反する。胴部は球形状をなすものと思われる。	口辺部内面上下のナデ。外面は横ナデ。胴部内面は逆時計まわりの篦削り。	砂粒	普通	内外面　暗茶褐色	14	11
H－3	かまど	甕	胴部の大半を欠く	口径　13.0	胴部の大半を欠くが球形をなすものと思われる。口辺部は直立ぎみで端部でやや外反。	内外面磨滅のため調整痕不明瞭。口縁端は丸みを持つ。	砂粒	普通	内外面　黄茶褐色	14	11
H－4	覆　土	手捏ね土器	口辺部を欠く	胴部最大径 9.0	厚みのある平底に肩のはる胴部がつく。	内面粗雑なナデ。外面篦の押えか？	良	普通	内面　黒褐色 外面　茶褐色	14	11
H－5	壁　溝	手捏ね土器	完　形	口径　9.9 器高　5.2	手捏ね土器で、底部には小さな平坦部をつくり、口縁端は丸くおさめる。	口縁部は直線でなく波状的で内面は横ナデで調整する。	砂粒	普通	内面　黒茶褐色 外面　茶褐色	14	
H－6	覆　土	用途不明	底部をわずかに欠く	口径　16.6 器高　11.4 ※	朝顔状に開き、口縁部は屈曲し外反する。底部は欠損しているが開いているのであろう。	口辺部横ナデ。体部外面ナデ。口縁はやや波うっている。	砂粒	普通	内外面　茶褐色	14	11
H－7	壁　溝	高坏	坏部と裾部を欠く	――	脚柱状部はゆるやかに開き裾部をつくる。	全面磨滅しほとんど調整痕は不鮮明。坏部接合の際の痕跡が内外面に見られるのみ。	砂粒	普通	内外面　黄茶褐色	14	
H－8	覆　土	高坏	基底部の¼の破片	基底部径 11.6	朝顔状に開く脚裾部で端部は上向きに突出し外傾する。	全面磨滅しており調整痕は不明瞭。	良	普通	内外面　黄茶褐色	14	
H－9	かまど	鉢	全形の¼を残す。底部は欠く	口径　37.4 ※	半球形状の胴部にゆるやかに外弯する口辺部がつく。	口辺内外面は横ナデ。胴部内面はナデ。外面は篦押え（？）の後に上下のナデ。	砂粒	普通	内外面　茶褐色	14	
H－10	床　面	甕	口辺部の¼を残す	口径　33.2 ※	復原できなかったが内面に青海波状の叩き痕を持つ胴部がつく大形の甕である。	直線的に外反する口辺部の端部外面は折りかえして帯状となる。	砂粒	普通	内外面　黄茶褐色	14	
H－11	床　面	甑	胴部の⅓を残す	――	口辺部、底部とも欠くので全形は知りえないが把手部付近が最大径をなすのであろう。	把手の接合方法は挿入して接合しているようである。	砂粒多い	普通	内外面　黄茶褐色	14	
H－12	かまど	甑	全形の½程を残す	口径　29.2 ※	底部より外傾して胴部のびその中位に把手をつけさらに直立ぎみにのび丸みの口縁で終わる。	把手はないが胴部の割れ口より見て挿入式の接合のようである。	砂粒	普通	内外面　黄茶褐色	14	

石製品（Fig. 15　PL. 9）

紡錘車（K－2～4）

紡錘車K－2～4は，いずれも覆土中からの出土ではあるがK－3はもっとも床面に近い部分から検出された。3点とも滑石製でK－3は，特に良質の滑石が用いられている。K－2は，截頭円錐形でわずかに一部分を欠く。下底面径3.8㎝，上面径1.9㎝，高さ1.5㎝，中心の貫通孔径7㎜，重さ25ｇを計る。上下面はよく研磨されており，体部斜面には上下方向の幅3㎜程の削り痕が認められる。K－3も，同じように截頭円錐形である。下底面径3.9㎝，上面径2.8㎝，高さ1.3㎝，孔径6㎜，重さ30ｇで，ほぼ大きさは同じであるが，薄いつくりをなしているため上面の径が大きくなっている。上下面は研磨されており，体部斜面には細かな削り痕が見られる。K－4は，円盤形で径5.2㎝，厚さ1.3㎝，孔径8㎜，重さ68ｇを計る。側周面は細かな削りの後に研磨を加えており，上下面の研磨も丁寧である。

砥石（K－5～7）

K－5とK－7は，粘板岩質の石材で，K－6は，砂岩質の石材が用いられている。K－5は，最大幅3㎝，長さ4.5㎝あるが図裏面は欠失しており，砥石の小破片と言えよう。ただし両側面は研ぎ面となっていることからすれば小型の砥石と思われる。K－6は，最大幅5.7㎝で長さは欠損のため不明。図裏面は原形をとどめている。研ぎ面は図表面の1面のみである。K－7は，断面不整4角形で研ぎ面は2面に見られ，1面は自然面を残すがあと1面には，約5㎜幅の削り痕が残っている。K－5，7は仕上げ，K－6は粗研ぎ用の砥石であろう。

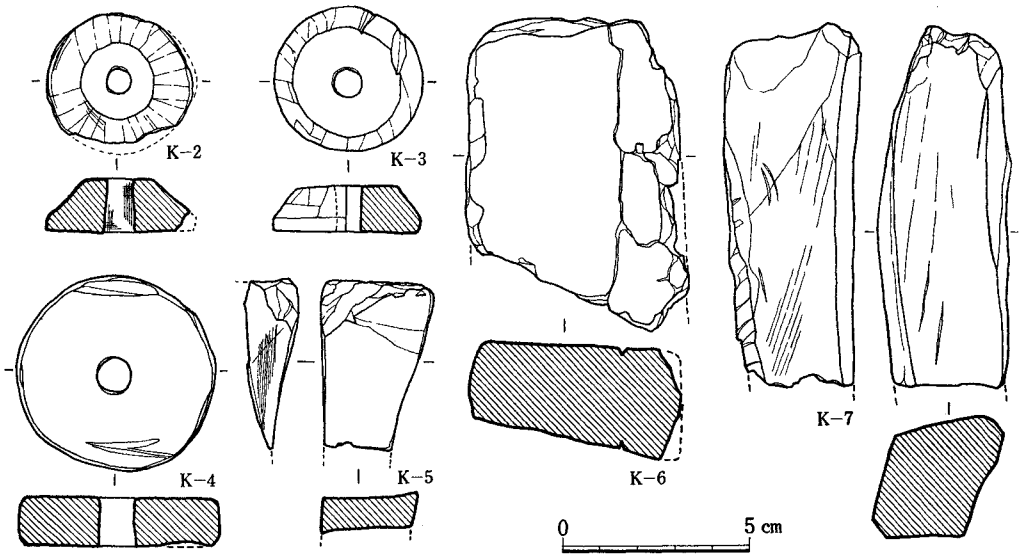


Fig. 15　第1号住居跡出土石製品実測図（縮尺½）

第2号住居跡　(Fig. 16, 17　Tab. 5　PL. 12, 13)

第2号住居跡は，第1号住居跡より南西部の¼を切られており，またA壁とD壁とのコーナーも畑の土手に入っているために各壁の計測値は正確でなく復原，推定値である。これによると第1号住居跡とは異なりA壁，C壁がB壁，D壁より長く，B壁よりD壁が長くなっているために，D壁に向って開きぎみの長方形の平面プランをなす。住居内には，6個のピットがあり，P－1，2，4，5が主柱穴と考えられる。P－2とP－3の関係はP－2が新しく掘られている。P－1～5のピットは，径70㎝前後の掘り方が認められ床面からの深さは約70㎝であまり差がないが，絶対標高からみればP－1，5がP－2，4より10㎝以上も深く穿たれている。床面はD壁に向かってゆるやかに傾斜しており，B壁とD壁の床面の差は約24㎝もある。このためD壁の立ちあがりは10㎝足らずである。壁溝は，A～C壁にコの字形にめぐりD壁には見られない。これはD壁部の床面が後世の耕作などによって削平されたと考えるよりも，当時より傾斜する床面であり，もともとD壁は壁溝を持っていなかった可能性がある。これは，D壁の床面はC壁の壁溝底レベルよりも約20㎝も低く削平されたという根拠にもなりうるが，壁溝の底部レベルはB壁が最も高くD壁に向って低くなっている。つまり壁溝の深さは，絶対レベルを等しくなるように掘られているのではなく床面の高さに支配されているので，もしD壁部に壁溝が掘られていたとすれば当然残っていなければならない。さらに主柱穴と考えたP－1，2，4，5の掘られ方は，床面の低い側のP－1，5も床面からの深さは同じであることからも床面が傾斜していたという推測の一根拠になりうる。したがって床面の差だけP－1，5の底部レベルはP－2，4よりも約10㎝低い結果となったのであろう。

遺物の出土量は，第1号住居跡に比し須恵器，土師式土器ともに少なく，第2号住居跡に伴うと考えられるものは，かまど付近から出土した遺物に限られよう。

かまどは，A壁の中央よりややB壁にかたよって作られており，かまどより破片ではあるが甕形土器(H—16)，甑（H—21）が出土しており，第1号住居跡より規模も大きく，はるかに残存状況はよい。かまどの製作は，壁溝を掘りめぐらした後に白色粘土で構築されていることが断面によって観察される。かまどの土層は，Ⅰ層が粘土で表面は黄緑色を呈している。Ⅱ層も同じ粘土であるが熱変化のためかなり赤色を増す。Ⅲ層はⅤ層と同一層とすべきであるがやや黒みをおび暗茶褐色となっている。Ⅳ層は黄茶褐色土でⅤ層とともに土器片を含有している。Ⅴ層は茶褐色でⅢ～Ⅴ層までは，小ブロック状に赤色，黄色の粒子と灰が入っている。Ⅵ層は焼土，Ⅶ層は地山と同じ土が貼りつけられている。これらの各層は，ほとんどかなりの熱を受けたらしく変化がはげしく本来は7層に細分されるべきものではなかろうが，逆に製作方法をよく知ることができる。それによると，かまどを設置する位置の壁を煙出しの部分のみを斜めに削り落とし，焚き口から火床部を床面よりわずかに掘りくぼめるとともに，先に壁溝が

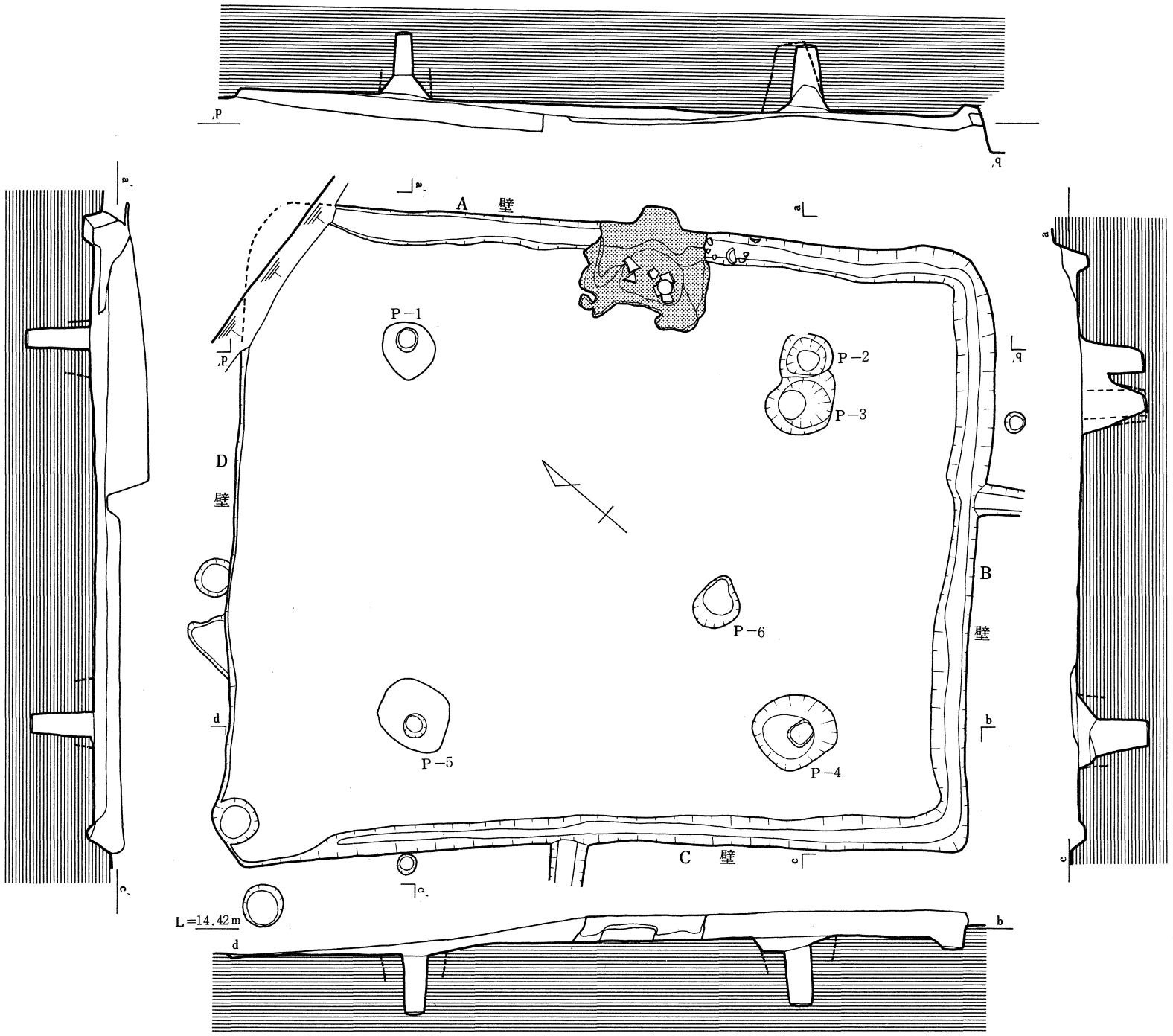


Fig. 16　第 2 号 住 居 跡 実 測 図（縮尺 1/60）

Tab. 5　第 2 号 住 居 跡 計 測 値 表

（単位 cm　※印は復原値）

平面プラン	壁長 A壁	壁長 B壁	壁長 C壁	壁長 D壁	住居内ピット数	P－1 径：深さ	P－2 径：深さ	P－3 径：深さ	P－4 径：深さ	P－5 径：深さ	P－6 径：深さ	壁溝	かまど	出土遺物 須恵器	出土遺物 土師器	出土遺物 その他	かまど 長さ	かまど 最大幅	かまど 焚口幅	かまど 高さ	総床面積
長方形	770※	625	780	690※	6	25×22：72	22×22：70	30×30：72	28×23：75	25×25：67	60×50：31	A～C	A	S－40	H－13	——	133	145	50	40	45.11㎡
床面長	735※	555	755	670※		桂間 430	P－2～P－4：400		415	P－5～P－1：410			壁	～S－49	～H－21						

掘られているので地山と同じ土でこれを埋めて両袖も同じようにしてコの字形のおおよその形を作り，その上に白色粘土を貼り外形を整えているようである。ただ焚き口の上には粘土があり，また口辺部を下にして出土した甕形土器は，粘土で固定しているようであり，これらの粘土が上からの流れでなければかまどの外形はコの字形ではなくロの字形をなしていた可能性が強い。

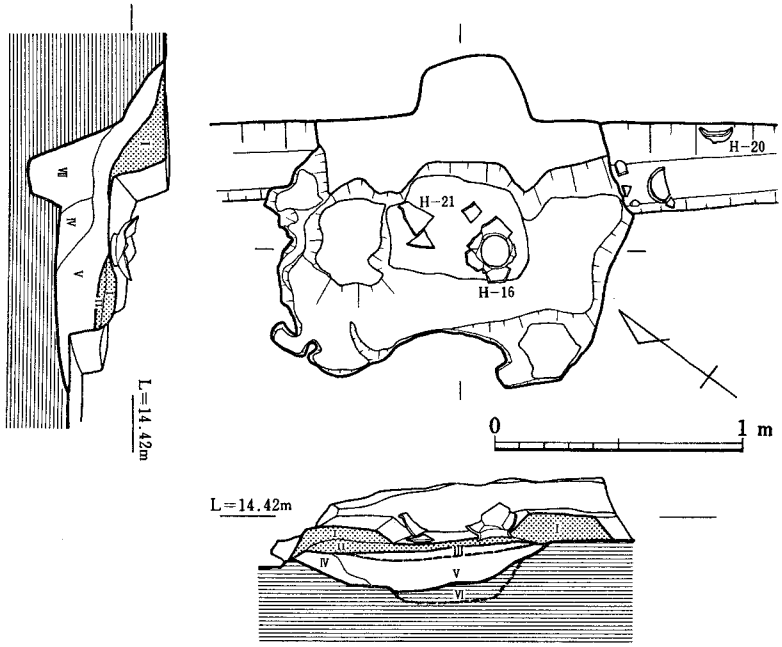


Fig. 17　第２号住居跡かまど実測図（縮尺1/30）

第２号住居跡の出土遺物

須恵器（Fig. 18　Tab. 6　PL. 14）

坏蓋（S—40～44）

S—40は，丸みのある天井部から，ほぼ同じ彎曲で口縁部へとつながるもので天井部と口縁部との間には凹線をめぐらしている。S—41，43は，口縁部から天井部への彎曲は同じであるが，S—41は口縁がやや外に開く。口縁部はS—40が長く器高の½程を占めており，S—41，43は短い。口縁端内面はS—40には明瞭な段があるが，S—41，43の段は鋭さを欠く。S—42，44は，直立ぎみの短い口縁部で，口縁端内面に段を持つ。これらを第１号住居跡出土の坏蓋の分類と同じ視点で分類すればS—40，41，43は**B類**に，S—42，44は**C類**に相当しよう。

坏身（S—45）

底部を欠き全形を知ることができないが，水平な受部に，直線的に内傾する立ちあがりがついており，受部とのなす角度は90度に近いことから，第１号住居跡出土の坏身**A類**に入ろう。

高坏（S—46～49）

図化しえた高坏は，有蓋高坏の蓋と脚裾部の４点である。S—46は，壁溝よりの出土で，天井部を欠くがつまみがつけられていたものであろう。稜部は，わずかに突出しているにすぎな

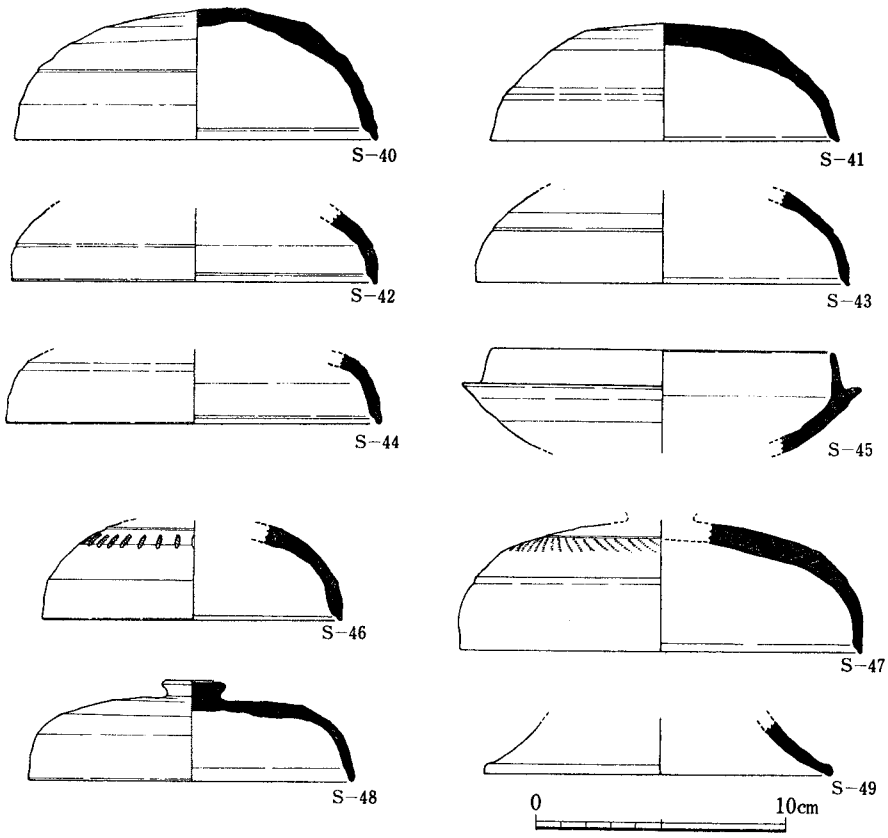


Fig. 18　第2号住居跡出土須恵器実測図（縮尺⅓）

い。S—47は，口径大きく稜部は突出せずに段を持っている。S—48は，完形で天井部につまみを持つ。口縁内面の段はその名残りを回転横ナデでとどめるのみである。S—49は，脚裾部で，裾端は丸みを持っている。残存部では窓の有無は判断できない。

土師式土器（Fig. 19　Tab. 7　PL. 14）

甕形土器（H—13～16）

H—13は，肩のはらない胴部に端部で小さく外反する口辺部がつく。H—14は，球状の胴部に内傾する口辺部がつく。H—15，16は，くの字形口辺を持つもので口縁端は丸くおさめる。

手捏ね土器（H—17，18）

H—17，18ともに平坦な底部で，器壁厚く内面は横に強く押してナデている。

高坏形土器（H—19，20）

H—19，20ともに坏部中位で屈曲し外傾する口辺部をつくり，同じような形態をなす。

甑（H—21）

H—11，12に比し胴部に丸みがあり，口辺部は大きく彎曲して外に開く。

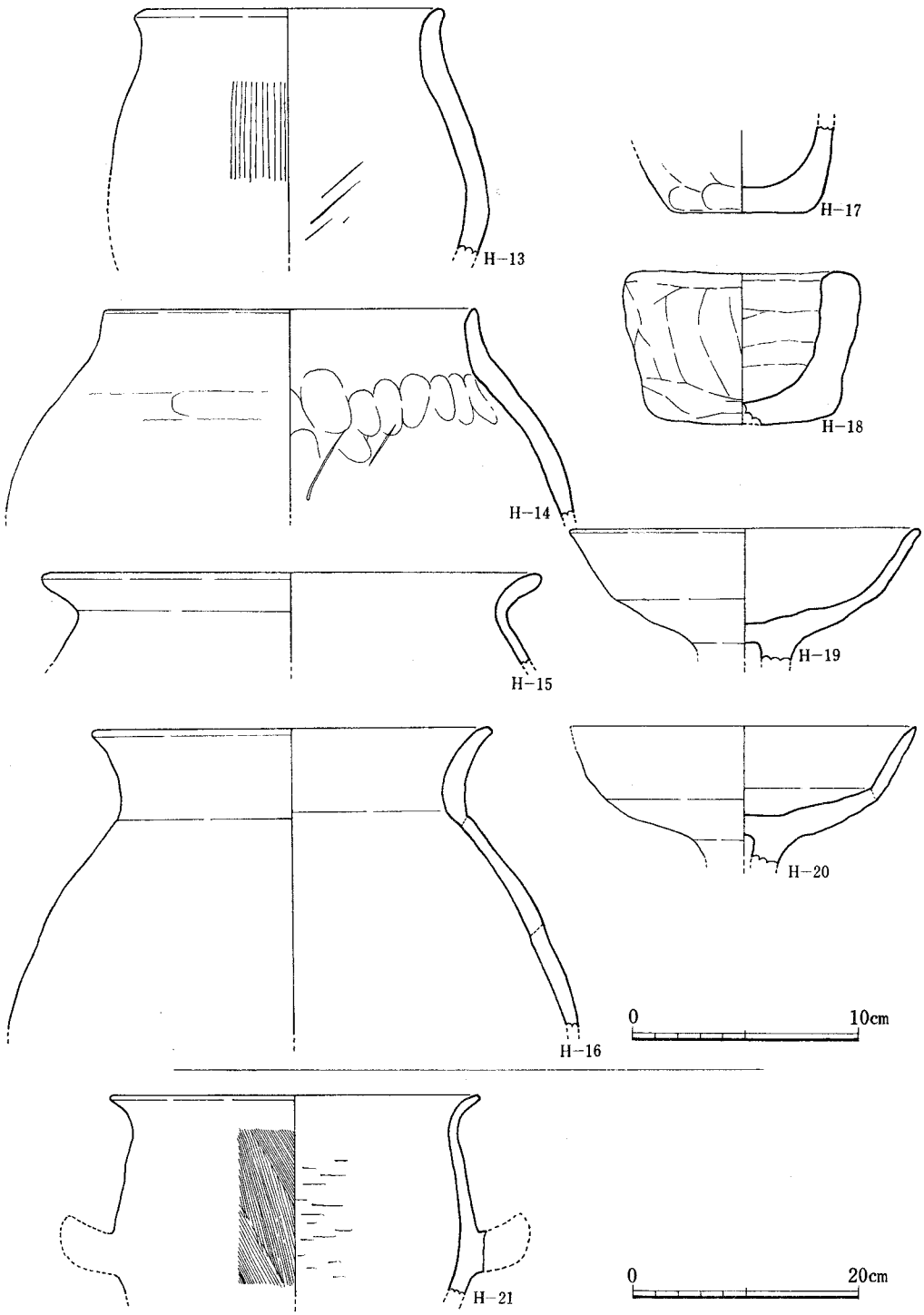


Fig. 19　第２号住居跡出土土師式土器実測図（縮尺⅓・⅙）

Tab. 6　第２号住居跡出土須恵器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考（ロクロ回転）	Fig.	PL.
S－40	覆土	坏蓋	ほぼ完形	口径 14.5 器高 5.2	天井部丸く、沈線で境とする口縁部は長めである。	天井部の篦削りは½を占める。口縁端内面には明瞭な段を持つ。	良	普通	内面 灰色 外面 暗灰色	順時計回転	18	14
S－41	覆土	坏蓋	全形の½を欠く	※ 口径 14.0 器高 4.7	S－40に比し天井頂部平坦で口縁部も短い。	天井部の篦削りは⅓程度。口縁端内面の段はない。	砂粒	普通	内外面 灰色	回転不明	18	14
S－42	床面	坏蓋	口縁部¼の破片	口径 14.2	口縁部短く、浅い沈線が天井部との境をなす。	口縁端は丸みを持つが細く、内面には明瞭な稜線がはいる。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	18	
S－43	柱穴	坏蓋	口縁部⅙の破片	※ 口径 15.0	口縁部と天井部の境はにぶい沈線がめぐる。	天井部の篦削りは⅔以上を占める。口縁端部内面は稜を持つ。	良	普通	内面 灰色 外面 灰黒色	順時計回転	18	
S－44	覆土	坏蓋	口縁部⅙の破片	※ 口径 15.0	口縁部と天井部の境には沈線がめぐるがS－43に比しさらににぶい。	口縁端は丸みをおび内面に沈線がめぐりにぶい段をなす。	良	普通	内面 灰色 外面 黒灰色	回転不明	18	
S－45	覆土	坏身	口縁部⅙の破片	※ 口径 13.6	受部はほぼ水平で、立ちあがりは垂直に近くのびる。	底部の篦削りは⅔以上を占める。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	18	
S－46	壁溝	高坏	口縁部¼の破片	※ 口径 12.0	天井部を欠く。天井部と口縁部との間には、わずかに稜を持つ。	口縁端は丸みがあり、内面ににぶい段を持つ。天井部中位に櫛列点文。	良	普通	内面 灰色 外面 暗灰色	回転不明	18	
S－47	覆土	高坏	全形の½程を残す	※ 口径 16.2	顕著ではないが稜部があり、口縁端内面には段を持つ。	天井部中位に櫛による右下がりの列点文を持ちその上に１条の沈線をいれる。	良	普通	内面 暗灰色 外面 灰色	順時計回転	18	14
S－48	覆土	高坏	全形の⅓を欠損	※ 口径 13.0 器高 4.0	天井部と口縁部の境、口縁端内面の段も不明瞭。	天井部内面はナデ調整。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	18	14
S－49	覆土	高坏	基底部⅙の破片	基底部径※ 14.0	高坏裾部の小破片のため全形を知りえない。	全面回転横ナデで端部は丸みをおびる。	良	普通	内面 灰色 外面 暗灰色	回転不明	18	

Tab. 7　第２号住居跡出土土師式土器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
H－13	壁溝	甕	胴部下半と口辺部の⅓を欠く	口径 13.4	長胴の胴部に直立ぎみの口辺がつき、口縁端はやや外反する。	口辺部内面は右上りのナデ。胴部内面は篦削りのようである。外面は上下の刷毛。	砂粒多い	普通	内面黒茶褐色 外面暗茶褐色	19	14
H－14	覆土	甕	全形の½程を残す。底部は欠く	※ 口径 16.0	口辺部は内傾し口縁端でやや外反する。胴部は球形状をなすものと思われる。	口縁はやや楕円形を呈する。口辺部横ナデ。胴部内面は篦削りの後に指頭状の押え。	砂粒	普通	内外面 暗茶褐色	19	
H－15	覆土	甕	口辺部の破片	※ 口径 21.4	「く」の字形に外反する口辺で口縁端は肥厚し丸みを持つ。	残存部は全面横ナデ調整している。	良	普通	内外面 淡黄褐色 断面 灰黒色	19	
H－16	かまど	甕	胴部下半部を欠く	口径 17.4	球形状の胴部に「く」の字形に外反する口辺部がつく。口縁端は丸みを持つ。	内外面とも磨滅すすみ整形法不明。頸部と胴部に粘土接合部が見られる。	砂粒	普通	内外面 明茶褐色	19	14
H－17	覆土	手捏ね土器	底部のみで口辺部を欠く	底径 5.7	底部は平底をなし、内彎ぎみに外傾し口辺部に続く。	内面は丁寧なナデ調整。外面は磨滅のため不鮮明。	良	普通	内外面 黄茶褐色 外面に黒斑	19	
H－18	覆土	手捏ね土器	全形の½程を欠く	※ 口径 8.0 器高 6.6	平底の底部から外傾ぎみに口縁にのび、口縁端は丸みを持つがやや平坦面をつくる。	内面は平行する横ナデ調整で外面は主に上下のナデ調整。	砂粒	普通	内外面 黄茶褐色 底部 黒褐色	19	
H－19	覆土	高坏	脚部と坏部の⅔程を欠く	※ 口径 15.4	坏部中位で屈曲し、直線的な口辺部がのびるが口縁端は丸みを持たせ外反する。	磨滅のため明確にしがたいが全面横ナデであろう。屈曲部内面には稜なし。	良	普通	内外面 淡黄茶褐色	19	14
H－20	壁溝	高坏	脚部と坏部の½程を欠く	※ 口径 15.3	H－19に比し坏部中位の屈曲は大きいが稜はにぶい。口縁端は丸みなく尖がる。	H－19と同じく調整痕不鮮明屈曲部内面にはにぶいが稜が入る。	良	普通	内外面 明茶褐色	19	14
H－21	かまど	甑	胴部⅓程を残す	※ 口径 32.4	把手の上から胴部は内傾し、口辺部で大きく屈曲する。	口辺部は横ナデ。胴部外面は細かい刷毛目、内面は篦削りの後に横ナデ。	砂粒	普通	内外面 茶褐色	19	

第3号住居跡　(Fig. 21　PL. 15)

第3号住居跡は，第4号住居跡によって切られ，大部分が宅地造成によって削り落とされているために，わずかにC壁の一部を残しているにすぎない。第1，2，4号住居跡が重複しながらも壁の方向をほぼ同じくしているのに比べると第3号住居跡のみが異なる方位を持っており，C壁の延長部は第2号住居跡のA壁延長部と約60㎝の間しかなく，第2号住居跡と同時に営まれていたかについては考慮する必要があろう。住居内にピット1個が検出されたが，壁溝の中であり主柱穴とは考えがたい。壁溝は，検出部で見るかぎりにおいてはB壁とC壁に掘られており，ここより完形で埦形土器2個が出土した。

第3号住居跡出土遺物　(Fig. 20　Tab. 8, 9)

須恵器（S—50，51）　**坏身**

S—50，51は同じような器形をなし，第1号住居跡のB類に類似している。

土師式土器（H—22，23）　**埦形土器**

H—22，23ともに丁寧な調整が施されており，小さい外反する口縁を持っている。

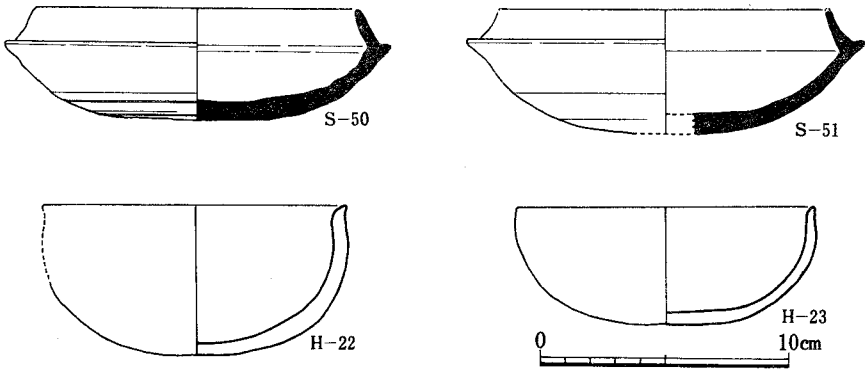


Fig. 20　第3号住居跡出土須恵器，土師式土器実測図（縮尺1/3）

Tab. 8　第3号住居跡出土須恵器一覧表

（単位cm　※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考（ロクロ回転）	Fig.	PL.
S-50	壁溝	坏身	全形の¼を残す	※ 口径 12.8 器高 4.7	立ちあがりはあまり弯曲することなく内傾する。	底部の篦削りは½程を占め受部端は丸みを持っている。	良	普通	内外面 灰色	順時計回転	20	15
S-51	壁溝	坏身	全形の¼を残す	口径 ※13.0 器高 ※5.0	立ちあがりのほとんどを欠くがS-49と類似し直線的である。	底部内面は回転横ナデ後にナデ調整であるがその範囲が広い。	砂粒	普通	内外面 灰色	順時計回転	20	

Tab. 9　第3号住居跡出土土師式土器一覧表

（単位cm　※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
H-22	壁溝	埦	わずかに口辺部を欠く	※ 口径 12.2 器高 6.0	半球形状の胴部に小さく外反する口縁がつき、その端部はやや尖りぎみである。	内面丁寧なナデ。口縁外面横ナデ。	良	普通	内外面赤褐色 底部 黒褐色	20	15
H-23	壁溝	埦	完形	口径 5.9 器高 4.8	H-22より器高低く、口縁の外反も小さい。	口縁横ナデ。全体的に丁寧な調整が施されている。	良	普通	内外面 茶褐色	20	15

第4号住居跡　(Fig. 21　Tab. 10　PL. 16)

第4号住居跡は，全体の½程を宅地造成によって削り落とされD壁は完全にないが，残存部によってかろうじて全形を復原しうる。B，D壁がA，C壁より約1m程長い長方形の平面プランを有している。住居内には4個のピットがあり，P－2～4が主柱穴と考えられ，床面からの深さは約84cm前後で4軒の住居跡のうちでは最も深く掘られている。柱間の距離P－2～3とP－3～4とでは10cmの差しかなく，壁の長さに比例していない。同じようなことは，第2号住居跡についても言及でき，正方形に近い平面プランの第1号住居跡よりも，柱の位置関係はより方形に近いことを指摘しうる。さらに第2号住居跡と比較すると，外形はほぼ同じ大きさであるが，柱間の距離は長く，第2号住居跡の壁長と柱間の距離との比よりも大きい。つまり壁に接近して柱穴が位置していることを意味している。壁溝は，A～C壁にみられ，D壁に向って深さを増している。床面の高さも壁溝に比例しており第2号住居跡と同じように当初から床面は水平でなく，D壁部に向って傾斜していたことが断定でき，このことは，第2号住居跡より床面の高い第3号住居跡が残存していることからも納得できるであろう。

検出部には，かまどは見られなかったがA壁部にはわずかではあるが焼土が認められた。またA壁に接して，長さ約1.9m(幅は不明)，住居床面より約45cm高い張出部があり，ここからも須恵器（S－68）が出土している。

第4号住居跡の出土遺物

遺物は，須恵器，土師式土器，鉄製品で，紡錘車などの石製品の出土はなかった。接合復原し図化できたものの多くは，床面と壁溝より検出されたもので，床面中央部に散存したような状況ではなかった。なおD壁は宅地造成によってすでに存在しないが，その崖面には張出部から第3号住居跡までの落ちこみが認められ，H－28はこの崖面からの出土である。

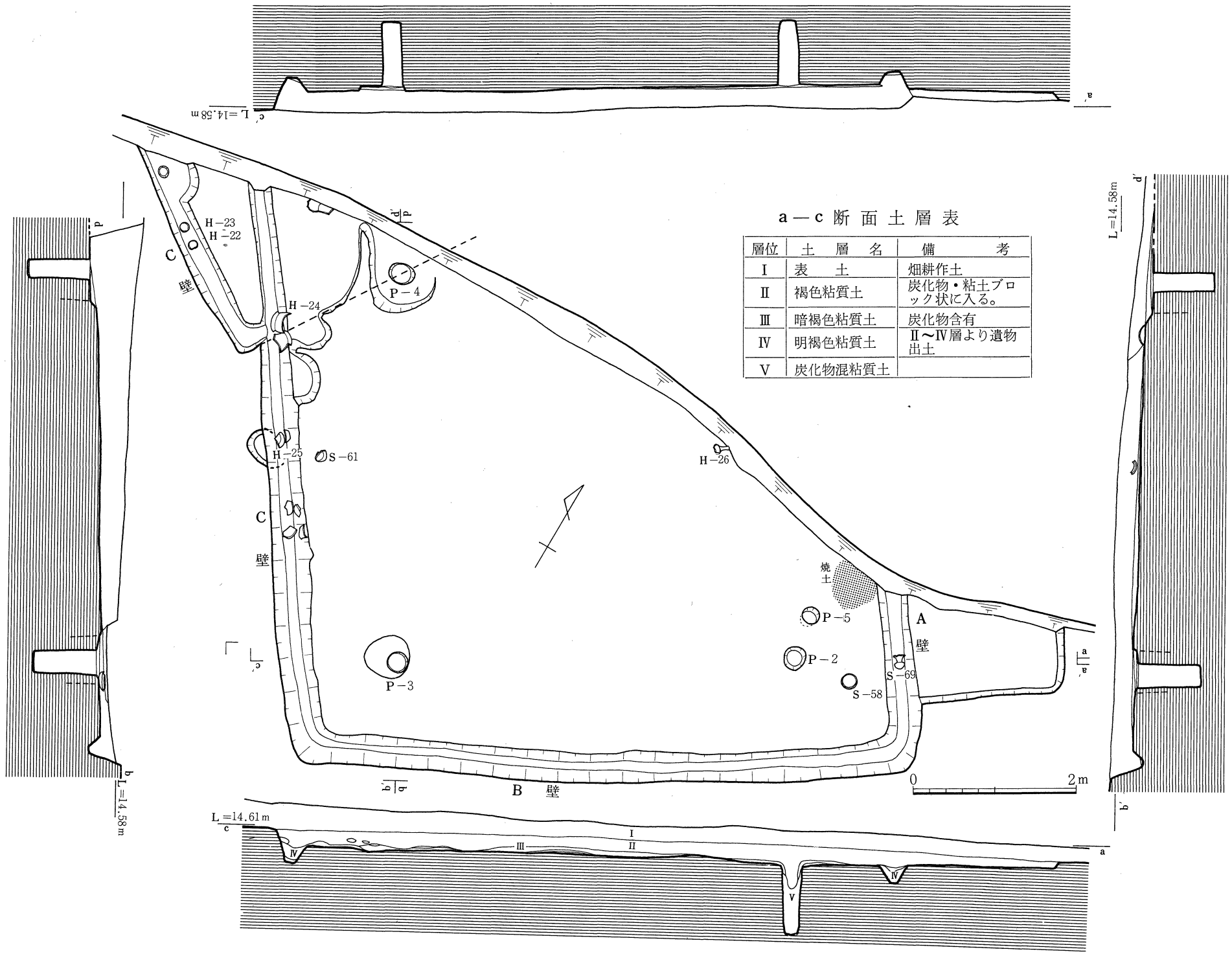
須恵器（S－52～69）(Fig. 22，23　Tab. 11　PL. 17)

坏蓋（S－52～54）

S－52は，稜部突出し，口縁部はほぼ垂直に立っている。口縁端内面の段はにぶく丸みを持つ。S－53は，稜部突出せず沈線がめぐり，口縁部も彎曲ぎみになるがあまり外に開かずにS－51の特徴を残している。S－54は，口縁部は開き，口縁端部でさらに小さく開く。これらは第1号住居跡出土の坏蓋分類に対応させると，S－52，53が**A類**，S－54が**B類**になる。

坏身（S－55～60）

S－55は，水平にのびる受部に，内傾する直線的な立ちあがりがつく。S－56は，立ちあがりは直線的ではあるがやや彎曲しているために受部との角度は小さくなる。S－57は，上向きの受部に外彎する立ちあがりがのびており，受部端，立ちあがり端は尖りぎみである。S－58は，同じような立ちあがりを持つ。底部はかなり変形しており焼成時に受けたものであろう。



a—c 断面土層表

層位	土層名	備考
Ⅰ	表土	畑耕作土
Ⅱ	褐色粘質土	炭化物・粘土ブロック状に入る。
Ⅲ	暗褐色粘質土	炭化物含有
Ⅳ	明褐色粘質土	Ⅱ〜Ⅳ層より遺物出土
Ⅴ	炭化物混粘質土	

Fig. 21 第 3，4 号住居跡実測図（縮尺 1/60）

Tab. 10 第 4 号住居跡計測値表

（単位 cm ※印は復原値）

平面プラン	壁長 A壁	B壁	C壁	D壁	住居内ピット数	P−1 径：深さ	P−2 径：深さ	P−3 径：深さ	P−4 径：深さ	P−5 径：深さ	P−6 径：深さ	壁溝	かまど	出土遺物 須恵器	土師器	その他	総床面積
長方形	200＋α	760	665※	——	4	——	27×27：81	25×25：83	30×25：85	20×20：24	——	A・B・C	A・B？	S−52 〜S−69	H−24 〜H−28	鉄製刀子	推定 39.99㎡
床面長	——	680	635※	——		桂間 ——		490	480	——							

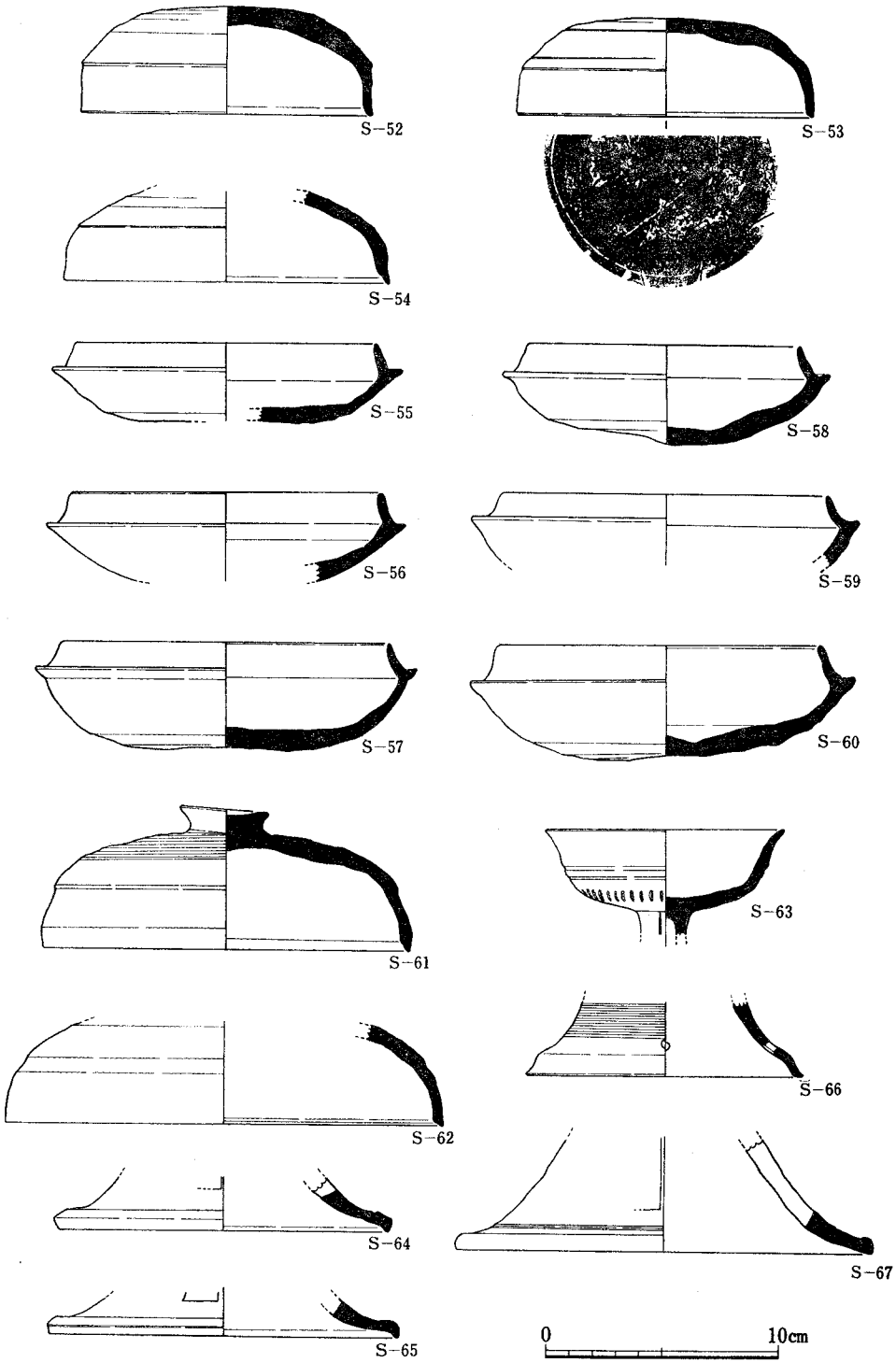


Fig. 22　第４号住居跡出土須恵器実測図（１）（縮尺⅓）

S—59は，立ちあがりの彎曲さらに大きくなり，受部も上向く。S—60は，厚めの受部から外彎ぎみの長い立ちあがりがつくが，立ちあがり端部では微妙に内彎し丸くおさめるという特徴を持っている。坏蓋と同じように第1号住居跡出土の坏身分類に対応させれば，S—55，56は**A類**に，S—57～60は**B類**になろう。

高坏（S 61～67）

S—61，62は，有蓋高坏の蓋で，S—61は床面より出土した。S—61の天井部つまみは，中央部が凹み左右へのはりは大きくない。稜部の突出はないが，回転横ナデの際に意識的に強く押えて段を作りだしている。S—60は，口径大きく，口縁内面は回転横ナデで外傾する口縁をなす。稜部はS—61と同じような手法で段をつけている。S—63は，坏部のみである。口縁は彎曲しながら開き，坏部中位に2条の凹線がめぐる。わずかに残った脚部には3方に上下の傷が認められることから，脚部は窓を持っていた可能性がある。S—64～67は，脚裾部である。S—64，65は，裾端部にやや違いはあるが形態的には類似しており3方にすかし窓を持っている。S—66は，やや特異な形態をなしており，朝顔状にそのまま開かず裾部で屈曲しており，端部は平坦面をなす。S—67は，裾端部近くに沈線がめぐり，その上にすかし窓をあけている。

壺（S—68）

S—68は，張出部からの出土である。胴部の下半部は回転ヘラ削りで，やや肩がはる。口辺部を欠くが短い直立する頸がつくものと思われる。

甕（S—69）

S—69は，ほぼ完形の甕で壁溝より出土した。球形状の胴部は肩がはり，直線的に外反する頸部には櫛目波状文が施されている。

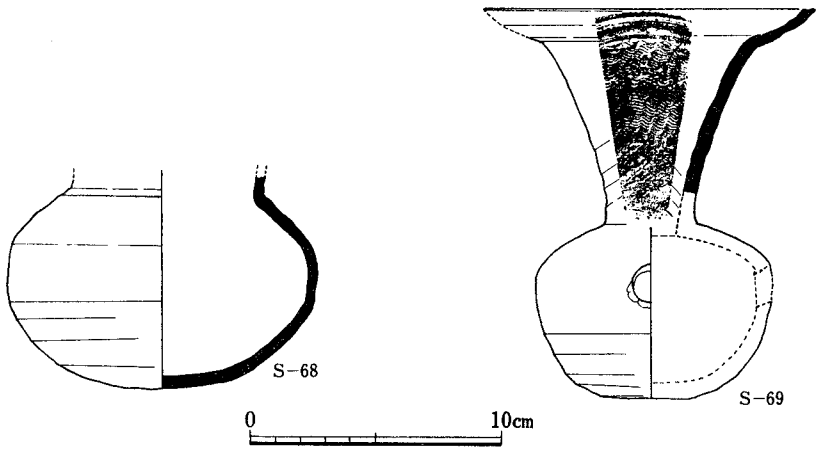


Fig. 23　第4号住居跡出土須恵器実測図（2）（縮尺1/3）

土師式土器（H—24～28）（Fig. 24　Tab. 12　PL. 18）

甕形土器（H—24）

H—24は，くの字形に外反する口縁を持ち，端部は丸くおさめている。第2号住居跡出土のH—16に比して，胴部は球形状をなさず，口縁部のつくりも異にする。

高坏形土器（H—25，26）

H—25は，壁溝からの出土で坏部の屈曲は中位より下にあり，したがって長い口辺部となっている。H—26は，脚部で床面から出土した。H—25とは接合しないが同じような坏部がつくのであろう。

手捏ね土器（H—27）

H—27は，厚い器壁を持つ手捏ね土器であるが，口辺部は強く押えて直立する口縁をつくる。

鉢形土器（H—28）

H—28は，口縁が長く急に外反しているが，形態的には第1号住居跡H—9と類似している。

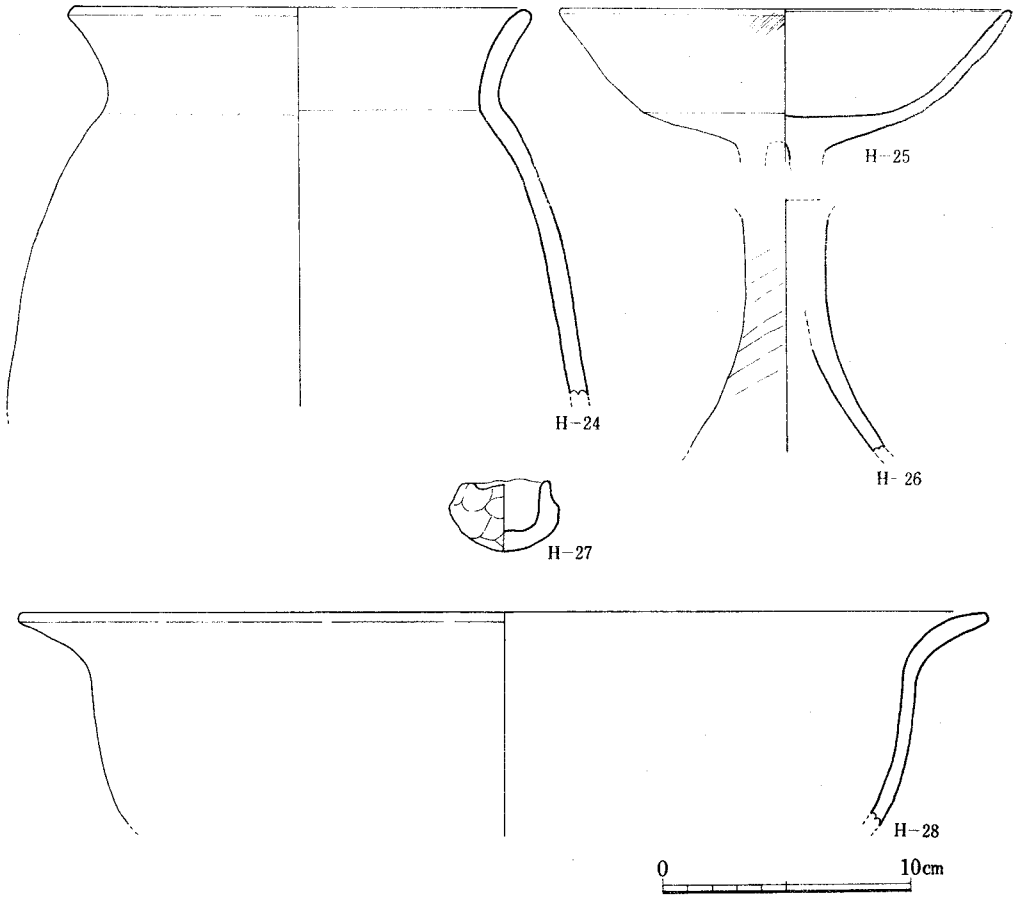


Fig. 24　第4号住居跡出土土師式土器実測図（縮尺1/3）

Tab. 11 第4号住居跡出土須恵器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考（ロクロ回転）	Fig.	PL.
S－52	覆土	坏蓋	全形の½を残す	※ 口径 12.4 器高 4.6	丸みのある稜部を持ち口縁部は直立する。口縁端内面には段はない。	天井部の篦削りは⅓程を占め、その一つの幅は狭い。	良	やや軟質	内面 白灰色 外面 淡灰色	回転不明	22	17
S－53	覆土	坏蓋	全形の½を残す	※ 口径 12.8 器高 4.3	天井部は平坦に近く、稜部はその上下に沈線を持つのみである。	天井部に篦記号を持つ。口縁部は直立し端部はS－52に比しさらに丸い。	良	普通	内外面 灰色	順時計回転	22	17
S－54	覆土	坏蓋	全形の¼を残す	※ 口径 13.8	天井部を欠くが丸みを持つのであろう。口縁端内両はにぶい段。	天井部の篦削りは⅓程を占め口縁部は強く回転横ナデし少し外反させる。	良	やや軟質	内外面 淡灰色	回転不明	22	
S－55	覆土	坏身	全形の¼を残す	※ 口径 13.0	水平の受部に背の低い立ちあがりがつく。底部は平坦に近い。	底部中位に幅広の沈線がありここより篦削りが始まる。	良	普通	内外面 灰色	順時計回転	22	
S－56	床面	坏身	全形の⅛を残す	※ 口径 13.0	受部水平で端部丸みを持つ。立ちあがりは中位で屈曲し上にのびる。	底部の篦削りの範囲不鮮明。立ちあがり端部は丸い。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	22	
S－57	壁溝	坏身	全形の¼を残す	※ 口径 14.0 器高 4.6	底部平坦ぎみ。受部は底部より大きく屈曲し斜め上方に出る。	底部の篦削りは⅓程。受部、立ちあがりの先端は細く尖る。	良	普通	内面 灰色 外面底部 灰黒色	順時計回転	22	17
S－58	床面	坏身	全形の⅓程を欠くがほぼ完形	口径 11.5 器高 4.3	口径小さく受部は上向く。立ちあがりは内傾するが端部で屈曲する。	底部内面に叩き痕？が見られる。底部の篦削りは⅓程に施される。	良	普通	内外面 灰色	順時計回転	22	17
S－59	覆土	坏身	立ちあがり部の¼を残す	※ 口径 13.8	受部やや上方にのび立ちあがりも彎曲が大きい。	残存部では底部の篦削り認められず全面回転横ナデ。	砂粒	良	内面 灰色 外面底部 黒灰色	回転不明	22	
S－60	床面	坏身	わずかに立ちあがりを欠くが完形	口径 13.8 器高 4.6	受部は肥大し端部丸い立ちあがりは長い。	立ちあがりは中位で屈曲し直線的にのび端部は丸くおさめる。	砂粒	普通	内面 灰色 外面底部 青灰色	回転不明	22	17
S－61	床面	高坏	高坏の蓋で全形の½を残す	※ 口径 15.6 器高 6.0	にぶいながらも稜部を持ち内彎ぎみの口縁部がつく。内面に段。	天井部の⅓程をカキ目を施し、上部につまみをつける。	砂粒	普通	内外面 灰色	回転不明	22	17
S－62	覆土	高坏	口縁部の⅓程を残す高坏の蓋	※ 口径 18.8	口径大きく稜部には幅広の沈線がめぐる。端部内面にはにぶい段。	天井部の篦削りは⅓程で口縁端部の段は回転横ナデによる。	砂粒	普通	内面 灰色 外面 黒灰色	回転不明	22	
S－63	第1・2号住居跡覆土	高坏	坏部の½程を残すのみ	※ 口径 10.2 基部径 2.5	口縁部は外彎しながら外に開く。脚基部の3か所にすかし窓の跡。	坏中位に2条の沈線めぐりその下方に櫛状の刺突文がある。	良	普通	内外面 灰色	回転不明	22	
S－64	覆土	高坏	裾部の⅓程を残す	基底部径※ 14.0	裾端部は回転横ナデで段をつくるがS－65のように稜を持たない。	全面回転横ナデ。すかし窓の一部が認められる。	砂粒	普通	内外面 灰色	回転不明	22	
S－65	覆土	高坏	裾部の⅓程を残す	基底部径※ 15.0	裾端部は直立しその上にわずかではあるが稜を持つ。	すかし窓の下端部のみ残るため全形を知りえない。	砂粒	普通	内外面 灰色	回転不明	22	
S－66	覆土	高坏	裾部の¼程を残す	基底部径※ 12.0	裾端部は外に出て平坦面をつくる。焼成前に穿たれた小孔がある。	裾端近くで大きく弯曲しておりその上方はカキ目が施される。	良	普通	内面 白灰色 外面 灰色	回転不明	22	
S－67	覆土	高坏	裾部の⅓程を残す	基底部径※ 18.0	裾端部は丸みをおびその上方に沈線がめぐる。	破片のためすかし窓の全形は知りえないが鋭利な道具が用いられている。	砂粒	普通	内面 灰褐色 外面 黒色	回転不明	22	
S－68	床面	壺	胴部はほぼ完形	胴部径 12.4	口縁部を欠くが短頸の壺と思われる。	胴部下半から底部は篦削りを施す。	砂粒	普通	内外面 灰色	回転不明	23	17
S－69	壁溝	甕	口縁部の一部を欠くがほぼ完形	※ 口径 13.4 胴部径 9.6 器高 15.6	胴部は肩を持つ。頸部は直線的にのび段をつくって大きく開く。	胴部肩に内傾する孔を穿つ。頸部上半には櫛目の波状文を施す。	砂粒	普通	内外面 灰色 胴部外面 黒灰色	順時計回転	23	17

Tab. 12　第4号住居跡出土土師式土器一覧表

（単位cm ※印は復原値）

No.	出土位置	器種	器部（残存部）	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.	PL.
H－24	壁溝	甕	胴部の下半を欠く	口径 18.0	胴部は球形状をなさずやや長めで、口辺部は「く」の字形に外反する。	口辺部は内外面とも横ナデ。外反部内面には鋭くないが稜線が入る。	砂粒	普通	内外面 茶褐色	24	18
H－25	壁溝	高坏	脚部を欠く坏部は完形	口径 18.0	坏部下位で屈曲してやや内弯ぎみに口辺部をつくる。口縁端部は横ナデで内弯ぎみ。	磨滅のため内外面とも調整痕不鮮明だが口辺部外面は刷毛目がわずかに見られる。	良	普通	内外面 黄茶褐色	24	18
H－26	床面	高坏	坏部と裾部を欠く	基部径 3.4	H－7と形態、手法ともに類似するが脚柱状部がやや細い。		良	普通	内外面 黄茶褐色	24	
H－27	壁溝	手捏ね土器	わずかに口縁を欠く	口径 ※3.4 器高 2.8	底部は丸底で厚みがあるが口辺部はややくびれており直立する。	内面は丁寧なナデ。口辺部外面は強く横ナデしくびれ部をつくる。	砂粒	普通	内外面 赤褐色	24	18
H－28	崖面	鉢？	口辺部の1/6程を残す	口径 ※38.4	H－9と大きな違いはないが胴のはりが少ない。	崖面出土のため磨滅はげしく全面に砂粒が露出する。	砂粒多い	普通	内外面 黄茶褐色	24	

鉄製品　刀子（Fig. 25　PL. 18）

住居跡からの鉄製品の出土は，きわめて少なく第4号住居跡の本例1点のみである。全体的に銹化がはげしく関部がやや不鮮明であり，茎部のほとんどを欠失しているが，関は棟まちと刃まちを有しているようである。刀身は平造で背は鋒まで直線で，刀身長8.3 cm，幅は関部で1.4 cmを計り背は平坦面をなす。茎部は断面は長方形をなすが，やや背側が幅広く，茎部には木質などの残存は認められない。

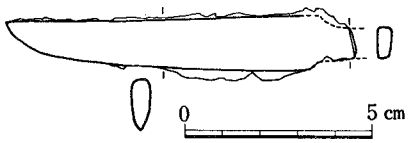


Fig. 25　第4号住居跡出土刀子実測図（縮尺1/2）

Ⅲ区には，2条の溝，4軒の住居跡の外に30数個の小ピットが検出された。これらの中には各住居跡と関連するものもあると思われるが住居跡の上部構造を明確にしえる資料を欠いているので，速断は避けるべきであろう。ただ福岡市内でも水田への宅地化が急激に進むとともに低湿地遺跡の発掘調査が多くなり，西区湯納遺跡，鶴町遺跡，四箇遺跡などで建築材の発見が相次ぎ建築史学からの検討も行なわれているので住居跡の上部構造が明らかになるのもそう遅いことではなかろう。Fig. 26 の**棗玉**は，住居跡外の小ピットより出土したもので，長さ1.9 cm，最大部径1.2 cmを計る。上下両面は平行でなく孔径は，1.4 mmと小さく，黒色の石製である。

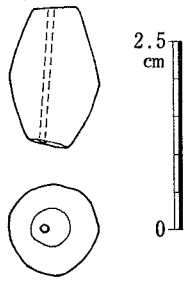


Fig. 26　Ⅲ区ピット出土棗玉実測図（縮尺1/1）

第Ⅳ章 まとめ

以上報告した調査結果に基づき，本遺跡の発掘調査の成果と問題点を整理してまとめてみたい。本遺跡は狭少な沖積地に伸びる低丘陵の舌状先端部に立地し，遺跡の範囲は発掘調査区を越えてなお西側と北側に拡がることは確実である。発掘調査を実施した面積は約930㎡であり，その中で検出した遺構は，ピット群，溝状遺構，柵状遺構，竪穴住居跡などである。

ピット群はⅠ～Ⅲ区にわたって検出されたが，いずれも掘り込みの形態や配置に規則性が認められず，しかも出土遺物も殆んど無いことから，それらの性格や時期については不明とせざるを得ない。

溝状遺構については，Ⅰ区において1条，Ⅲ区において2条を検出したが，Ⅰ区の溝状遺構は，近世の白磁片が出土しており他の遺物は含んでいず畑耕作時のものと思われた。Ⅲ区の第1号溝は，掘り込みが不明瞭で浅く，遺物も須恵器と陶磁器を混在し，人為的な遺構とするよりも自然の落ち込みと考える方が妥当性があるかも知れない。第2号溝については，ハの字形に開き，掘り込みはゆるやかな傾斜をもつ溝であり，溝内に堆積した土層は5層に分けられる。Ⅱ～Ⅴ層より須恵器と土師器を出土するが，層位的な形態上の変化は認められない。北東延長部分の発掘が不可能であり全体の形状は不明である。出土須恵器中に第1号住居跡出土の高坏と同一個体のものがあり，住居（群）を囲む溝としての機能も考えられよう。

Ⅱ区で検出した柵状遺構は，幅約1.2ｍ，長さ10ｍの溝状の掘り込み底部に，不整円形のピットが等間隔に連続して掘られていることで「柵」の機能をもった遺構であると判断した。しかしながら発掘面積が狭かったため，これと関連する遺構などの存在は不明であり，はたしていかなる機能を有していたものか断定できない。出土遺物は，わずかに須恵器の坏蓋1点を数えるにすぎない。この坏蓋は，住居跡出土の須恵器にも認められるA類のもので，須恵器編年ではⅡ期に該当しようが，この遺物をもって柵状遺構の下限年代の一端を示すものと考えることは，その出土状態からもまた数量的にも不可能で時期決定にとっては資料不足と言わざるをえない。

竪穴住居跡はⅢ区の中央部から北側に集中して4軒を検出したが，他の遺構の性格や時期の不分明からして，これらの住居跡は本遺跡を特徴づける中心的な意義をもつ遺構であると言えよう。したがって，以下竪穴住居跡の分析を中心にして本遺跡の問題点を整理する。

竪穴住居の時間的先後関係，並存関係と年代

4軒の竪穴住居跡のうち，全体の形状をほぼ知り得るのは，第1号，第2号であり，第4号

が全体の約2分の1，第3号はわずかに1つの壁コーナーを知り得るにすぎない。これら各住居跡の切り合い関係は，第1号が第2号を切り，第4号が第3号を切っていることが確かめられ，それぞれ第2号→第1号，第3号→第4号という時間的先後関係を知ることができる。次に平面的な位置関係については，第2号と第3号はその間の距離が約1.2 m，第2号と第4号も約2.2 mしか離れておらず，上屋構造が明確ではないが，これらの組合せによる同時並存の可能性は無いと言えよう。しかしながら，第1号のA壁と第4号のC壁間の距離は約4.6 m，同じく第1号の北東壁コーナーと第3号のコーナー間の距離は約4.4mあり，第1号と第3号，または第1号と第4号の各住居が，同時期に棟を並べていた可能性は考えられよう。これらの各住居跡の切り合い関係と位置関係を総合すると，その築造における変遷については，次のような可能性を与えることができよう。

まず，第1号と第4号が同時並存していたと仮定すれば，①第2号または第3号の築造，②第3号または第2号の築造，③第1号と第4号の築造という順序を得る。次に第1号と第3号が同時に並存していたと仮定すれば，①第2号を築造，②第1号と第3号を築造，③第4号の築造という時間的な順序を得る。また，いずれの住居も時間的に先後関係をもつとすれば，ⓐ第2号→第1号→第3号→第4号，ⓑ第3号→第2号→第1号→第4号，ⓒ第3号→第2号→第4号→第1号，ⓓ第2号→第3号→第1号→第4号，ⓔ第2号→第3号→第4号→第1号，ⓕ第3号→第4号→第2号→第1号という6種類の時間的先後関係の型を想定できる。

これらの住居跡より出土した遺物のうち，確実に時期決定の手がかりとなるのは須恵器であるが，出土状態，数量，形態の諸特徴などから，最も主要な決め手となるのは，蓋坏であるので，それを中心に時期を検討してみよう。まず蓋については，第1号においてはA～D類が出土したが，床面からはB類の蓋が出土している。第2号ではB類とC類が出土し，いずれも床面および壁溝内において検出されている。第3号では蓋は検出されず，第4号においてはA類とB類を出土し，B類が主体を占めている。また身については，第1号ではA類とB類，第2号ではA類のみが認められた。第3号においてはB類，第4号ではA類，B類が検出されたが，B類が主体である。これらの須恵器を北部九州地方の須恵器編年[註③]に適用すれば，蓋については，A類はⅡ期のやや下降する形態のもの，B類はⅢa期，C・D類はⅢb期に比定されよう。また身については，A類はⅢa期，B類はⅢb期に比定できよう。他の器種についても，形態的な特徴はⅢ期に収まるものばかりで，時間的に大きな隔たりを認めることはできない。

以上，各住居跡間の切り合いや位置関係および出土須恵器の編年観から各住居の年代を総合すれば，第1号がⅢa期を中心とする時期，それに切られている第2号もⅢa期，第3号についてもⅢa期，第4号はⅢa～Ⅲb期にかけて営まれていたと考えられ，これら4軒の竪穴住居は，6世紀後半代の時間的にきわめて短い時期に建て替えられたことが推測される。したが

って，この狭い空間に最大2軒の住居が棟を並べていたことは充分に予想され，当時の居住区域における土地利用（分割）上の規制を考える上で有力な示唆を与えるものであろう。

竪穴住居跡の構造について

これらの住居跡の規模と構造については第Ⅲ章で詳述したとおりであるが，次にこれらに共通する構造上の特徴と問題点を述べる。

第1号住居跡は，地山の傾斜とほぼ同一方向に主軸をとる方形プランの住居跡で，主柱穴は4個であり，これら柱穴間の長さは壁長に比例している。柱穴の深さは床面からほぼ一定であり，床面の傾斜（南東→北西）に従い，柱穴底部の水平深度は異なっている。壁溝は断面が逆台形を呈し全周していたと考えられるが，第2号住居跡との重複（切り合い）部分は不明であった。溝の底部に支柱の存在を示すようなピットなどの掘り込みは検出されていない。かまどは傾斜下位のD壁（北西壁）中央部に粘土をもって構築され，支脚などは設けられていない。耕作などによってひどく破壊を受けているために詳細な規模と構造は不明であるが，コの字形を呈していたのであろう。貯蔵穴，張出部などの他の施設は認められない。床は第2号住居跡との重複部ばかりではなく全体的に貼床されており，第2号住居が廃棄されて時間的に隔てることなく築造されたものと考えられる。また，火災による廃絶などを示す痕跡は検出されなかった。

第1号住居跡に切られている第2号住居跡は，主軸の方位を異にする大形の住居跡であり，プランもやや開き気味の長方形を呈する。しかしながら，主柱穴の数，壁溝の有無，かまどの付設，貯蔵穴の有無など，その基本的な構造においては第1号と全く共通する特徴をもつ。ただ細部における相異は，柱穴の位置が第1号に比べてより正方形に近くなっていることであり，柱穴間の距離と壁長がかならずしも比例しない点である。かまどの残存状態は良好で，プランはロの字形，支脚等の付属物は無い。その構築にあたっては，竪穴および壁溝を掘った後かまどの位置の床面をレンズ状に掘り，粘土をもって形をなしたことが知られる。また煙出し部はその断面から壁際の外側にあったことが観察される。

第4号住居跡は全体の2分の1が残存しているにすぎないが，構造的には第2号に共通するものと思われ，やや長方形に近いプランで主柱穴も4個であることはまず確実であろう。ただこれらの柱穴の位置は壁際に近くなっており，柱穴間の距離は，4軒の住居跡のうち最も長い。かまどの付設については，削り落とされている北側崖面に焼土層と第1号住居跡のかまどより出土した鉢形土器（H—9）とよく類似した形態をもつ土器（H—28）が検出されていることなどからA壁（北東壁）に付設されていたものと考えられる。

第3号住居跡については全体の構造は全く不明であるが，出土遺物は時期的に近いことを示しており，ほぼ共通する構造であったと考えられる。

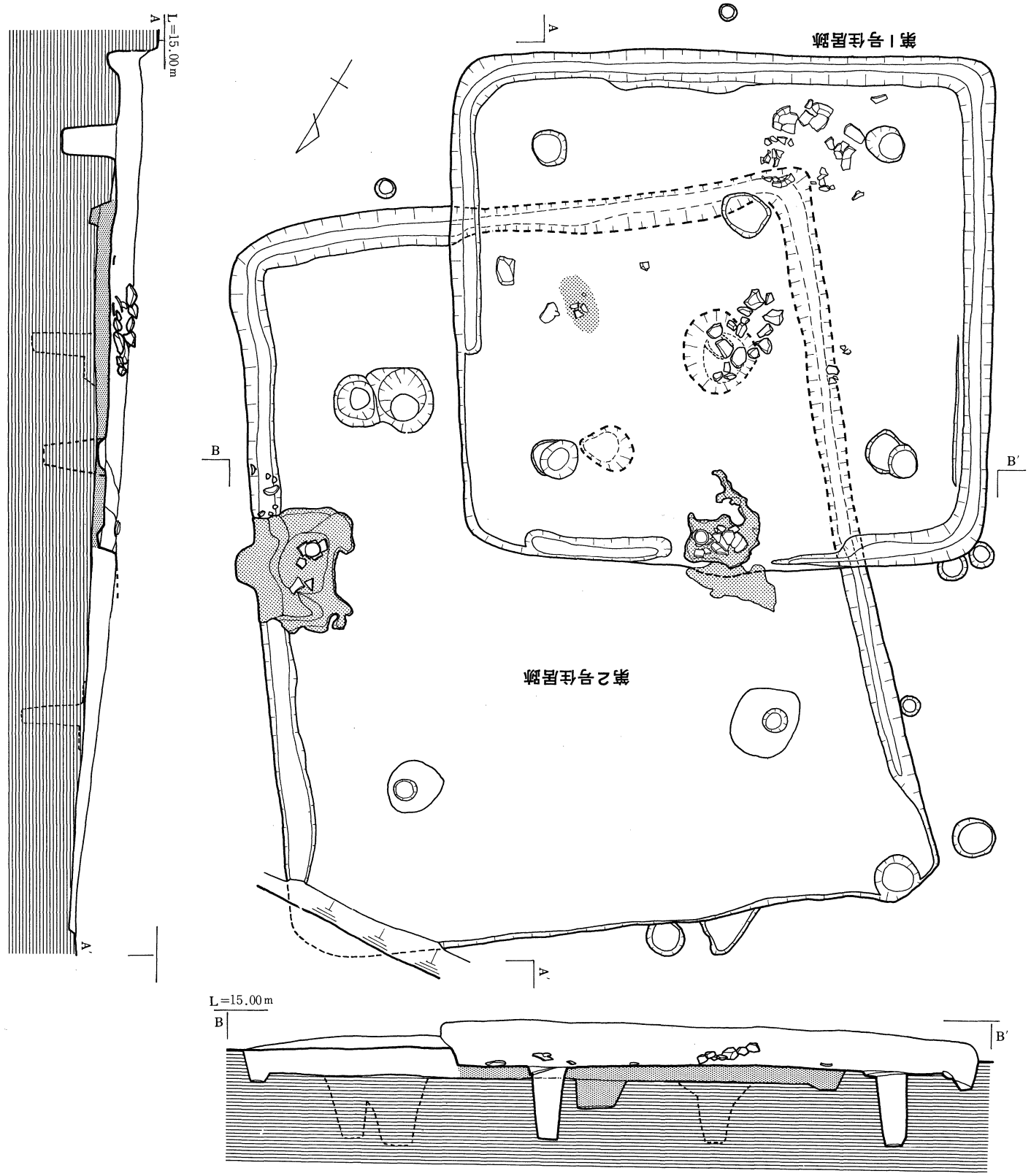


Fig.27　第1，2号住居跡切り合い関係実測図（縮尺 1/60）

さて，これらの竪穴住居跡は第1号，第2号住居跡において典型的に示されるように，方形プラン，または方形に近い長方形プラン，主柱穴が4個，およびかまどを付設するという共通する構造上の特徴をもつと言える。すでに指摘しているように，これらの住居跡間には，壁長と主柱穴間の長さに一定の規則性は見出されないが，このことは同時期の他の類例遺跡における住居跡においても同様であり，少なくとも竪穴の掘り込みと主柱の配置との関係に統一した規準はなかったと考えられる。特に本遺跡検出の4軒の住居跡は，建て替えがごく短期間に行なわれたことが推測されることから，その建て替えの原因を明確にする必要があるが，各住居の設計，つまり床面積や主柱穴の配置，上屋の構造などは，その住居の家族構成，および住居群（集落）におけるその家族の地位や性格，住居内の空間利用等による違い，さらには建築材などによる規制などさまざまなことが原因となって各々異なる設計がなされたものと思われる。いずれにしても上屋を含めた全体の建築学的構造については，最近各地で調査例を増しつつある低湿地遺跡出土建築材の分析と共に今後明らかにされるであろう。また，かまどを付設する点では，古墳時代後期に全国的に定着する現象とされるが，その出現時期は九州地方以外では，古墳時代中期に遡る例があり[註②]，特に山陰地方ではすでにこの時期に移動式の土師製かまどが知られている[註③]。九州地方においては，古墳時代のかまど付設住居跡は最近福岡県を中心に出土例を増しつつあり[註④]，須恵器の編年でⅢa期以降に集中しているようである。またⅢ期以前に遡る確実な出土例としてⅡ期の時期の太宰府町裏の田遺跡[註⑤]が知られており，さらに1976年10月に調査された福岡市西新町遺跡[註⑥]においては，弥生時代終末期に属する方形竪穴住居跡の壁コーナーに粘土を用いてかまど状の施設を設けている例が発見されている。しかしながら，西新町遺跡例をもってかまどの初源的形態とし，これが引き続き古墳時代に発展的に継承されたとするにはいまだ資料不足と言わざるをえないであろう。なお，造り付けかまどから移動式の土師製かまどへの転換時期については，山門郡瀬高町鉾田遺跡[註⑦]で奈良時代の遺物と共伴する土師製かまどの例が知られているが，一方では同時期の福岡市有田遺跡[註⑧]，福岡市上和白遺跡[註⑨]においては造り付けかまどが存続している。また筑紫郡太宰府町成屋形遺跡[註⑩]の調査例では，7世紀後半から8世紀後半にかけての3軒の竪穴住居跡が知られ，造り付けかまどから移動式土師製かまどの転換期は8世紀の後半頃に求められている。

このように本遺跡の発掘調査は，時間的な制約から狭い発掘面積となり，検出した遺構も少なかったが，4軒の住居跡とこれに関連するものと思われる溝や柵状遺構の提起する問題は多く，これからの九州地方における古墳時代の住居跡および集落の研究にとって示唆に富む遺跡として意義づけることができよう。しかしながら，この種の研究課題として真に追求されるべきことは，検出した住居跡の住人，つまり集落の構成員がいかなる人達であったかということであろう。このためには，まず集落の規模を明らかにするために広範囲な発掘調査をする事も

必要であろうが，緊急調査という枠づけの中での発掘では不可能なことであり，むしろ各住居跡における個別的な検討，つまり住居の構造，建て替えの原因とその時間的推移，さらには，出土遺物における器種，数量，組合せ，出土状況なども住居の廃絶，埋没，あるいは（食）生活を通しての生産形態など多面的に有機的な関係をなすのであろうからこれらを緻密に検討してこそ住居（集落）を営んだ人達の生活とその意識構造に肉迫できるものと思われる。

註①　九州地方の須恵器の編年は小田富士雄氏を中心に進められ，ここでは氏による編年に依拠した。
②　石野博信「考古学から見た古代日本の住居」（大林太良編『日本古代文化の探究「家」』社会思想社）1975年
③　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1976年
④　九州地方における古墳時代かまど付設竪穴住居跡の発掘報告例は次のようなものがある。
筑紫野市大曲り遺跡５軒　福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集』1970年
同　野黒坂遺跡17軒　同　上
筑紫郡太宰府町池田遺跡１軒　同　上
八女郡広川町平原遺跡２軒　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1972年
筑紫野市八隈遺跡６軒　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』1976年
小郡市宮裏遺跡６軒　福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ』1974年
鞍手郡若宮町田尻遺跡１軒　福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第１集1976年
福岡市有田遺跡４軒　福岡市教育委員会が1976年に発掘調査。1977年調査概報書発行予定。
⑤　太宰府町裏の田遺跡　福岡県文化課酒井仁夫氏の教示による。1977年報告書発行予定。
⑥　福岡市の地下鉄建設に伴う発掘調査で，現在も調査途上にある。折尾学氏の教示による。
⑦　鏡山　猛「土師質竈の新例」（九州考古学会『九州考古学１』）1957年
⑧　有田遺跡調査団『有田遺跡第１次発掘調査概報』1967年
有田遺跡調査団『有田遺跡』1968年
⑨　福岡市教育委員会『和白遺跡群』1971年
⑩　亀井明徳『成屋形遺跡古代住居址発掘調査報告』1970年

あ　と　が　き

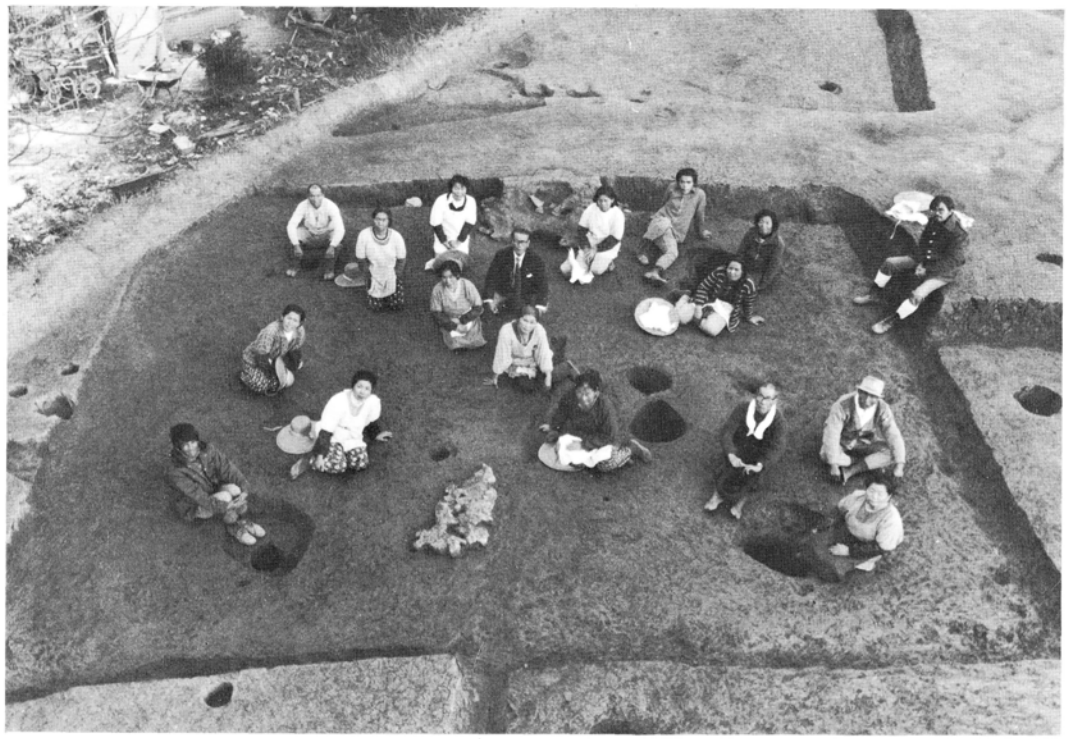
片江辻遺跡を発掘調査してから1年余を経たいま，ようやく本書を発行することになりました。図面や出土遺物の資料整理期間中には，他の業務を兼任するなどでいく度となく作業を中断せざるをえませんでした。どうにか報告書としての体裁をもって上梓することができたのは，多くの人達のご協力と，整理補助員の花畑照子，高倉栄美さんの労によるものですが，短期間の資料整理だったために編集者二人の討議も満足になしえず，けっして学術的な内容をもった報告書とは言えません。

まとめの章にも記しているように，発掘調査にあたっては，考えられるあらゆる問題点と可能性を基にして作業を実施しましたが，今回の発掘調査は，考古学における「学」としての発展段階とそれに規定された調査方法，発掘技術によるものであって，本遺跡のすべてを語りうる結果を得たというわけではありません。このことは冷酷ながらも破壊のための調査，遺跡を破壊したということを示しています。むろん，前記したように学術的なことのみから言えば，その発展段階と可能性からして，今日的な水準による方法と技術で発掘調査を実施し，またその結論を出すことは不自然なことではなく，容認されることなのでしょうが，だからこそ開発行為に対して発掘調査（記録保存）によって処理しようとする現在の行政側の対応策，いわば発掘至上主義は，もっとも危険性があり，埋蔵文化財に対する罪悪的行為であると断定せざるをえません。

私達埋蔵文化財にかかわる者にとって，発掘調査記録を迅速に公にすることや，はたまたいかに学術的な資料の集成や検討を加えた内容にするかという事も重要なことでしょうが，いわゆる報告書偏重の傾向ではなく，真の目的は，いかに遺跡を守り，発掘件数や面積を少なくしていくかということであり，ここに拠点を設定しない限り将来に向けての記録（報告書）は出現しないのではないかと考えます。このような意味からして，本書は報告書として不完全であり，発掘担当者としての責を痛感しております。しかし幸いにも，区画整理組合のご理解により第一次調査の片江6～8号墳は保存され，さらに今回の調査では，遺跡が区画整理事業の根幹になる道路部に位置していたために保存することは不可能でしたが，周辺部に遺跡は拡がり，また事業地内にはほかにも多くの遺跡が知られていることなどから区画整理組合は積極的に埋蔵文化財保存に対処していくという姿勢をこめて遺跡説明板等の記念碑を片江辻遺跡に建立するということになり，大いに感謝しています。来年度も継続して西地区（甕棺墓）の発掘調査を予定していますのでどのように区画整理事業と対応し，保存という型で組みこめるものかなどをお互いの共通する課題として協議を重ねていきたいと思っていますし，編集者二人の教訓とし，これからの指標としたいと思います。

（塩屋・力武）

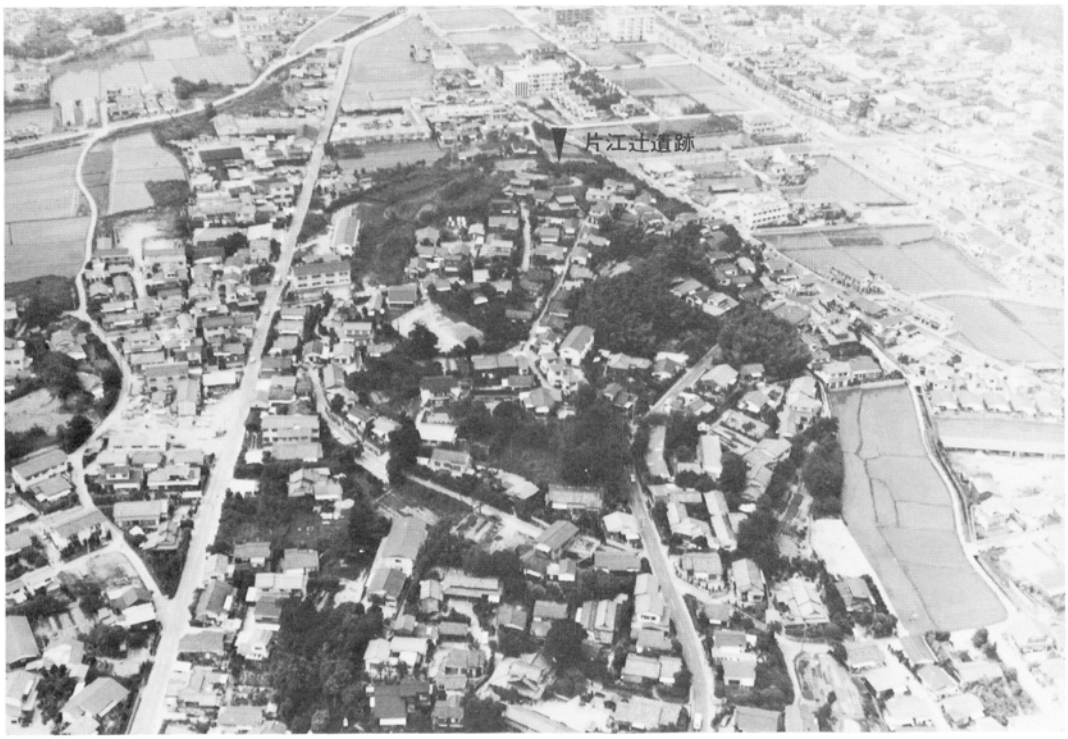
図　版



発掘作業員のみなさん（昭和50年12月 第２号住居跡内）

片江辻遺跡周辺航空写真（昭和49年４月撮影　縮尺１／15,000）

1．片江辻遺跡航空写真　西側より　（昭和51年６月撮影）



2．片江辻遺跡航空写真　南側より　（昭和51年６月撮影）

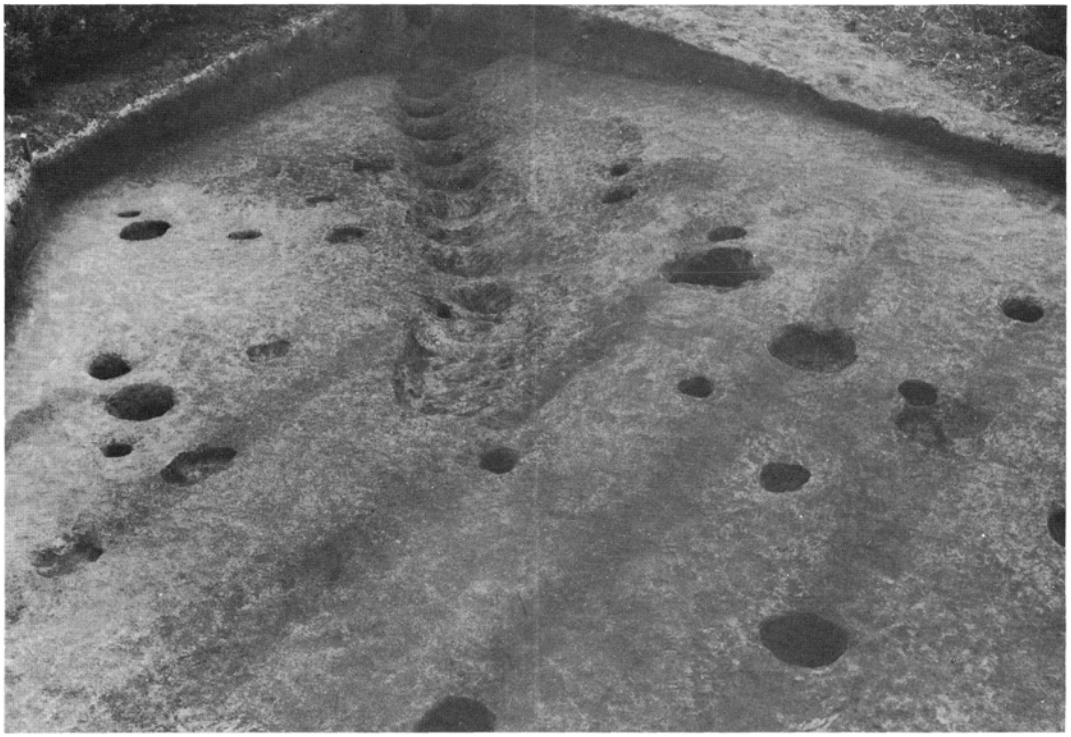
1．Ⅰ区全景

2．第1トレンチ

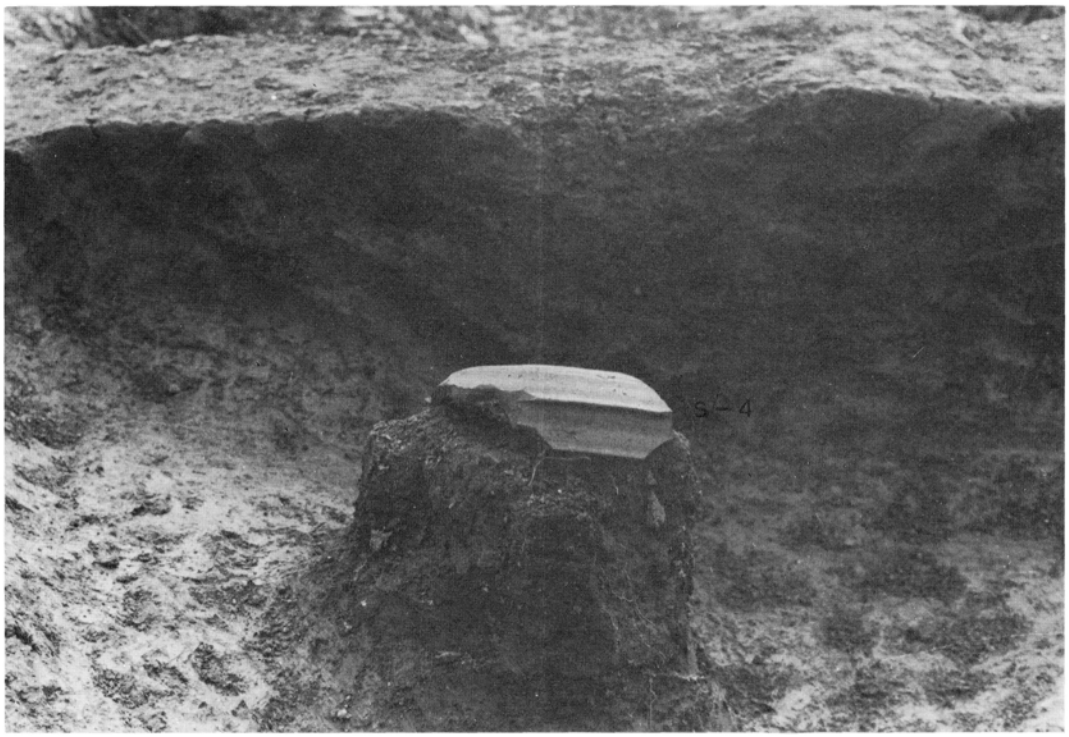
3．第2トレンチ

1．II区発掘作業風景

2．II区遺構全景



1　柵状遺構　南側より



2．柵状遺構土器出土状況

1　Ⅲ区遺構全景　南側より

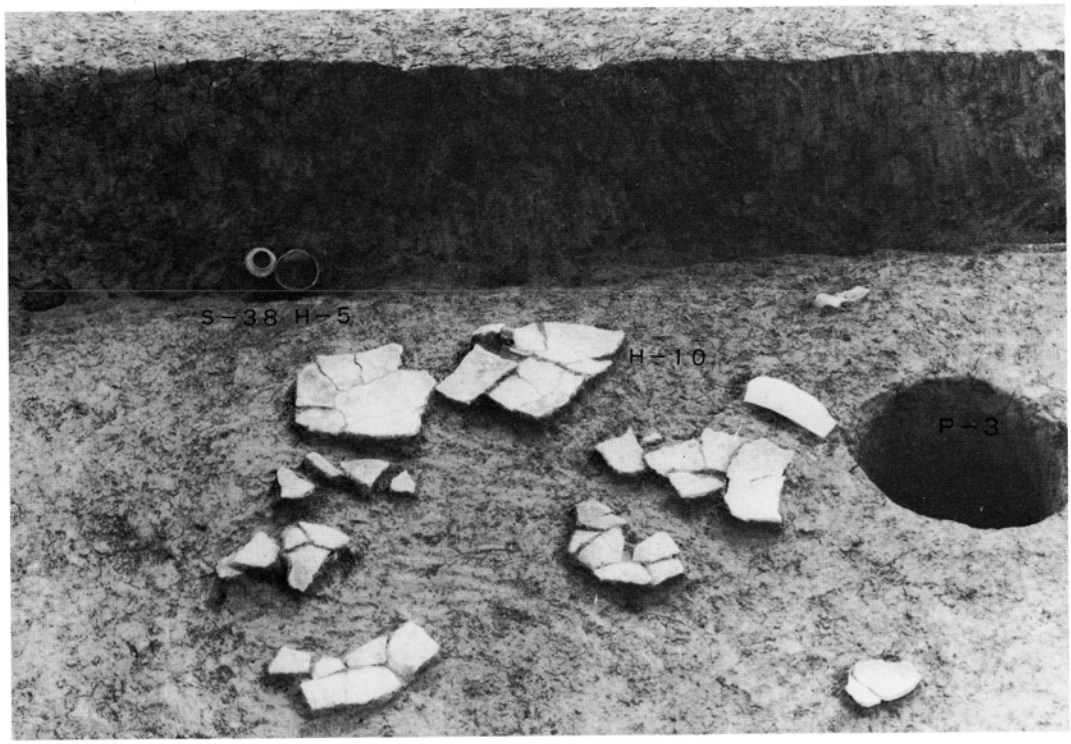
2．Ⅲ区遺構全景　西側より

1．Ⅲ区第２号溝

2．第２号溝土層断面

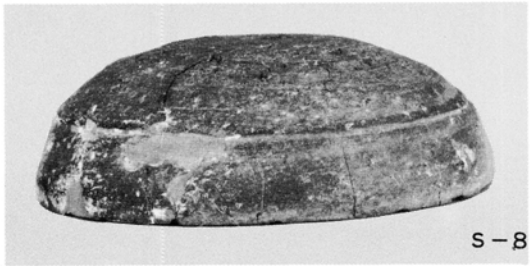
1．第１号住居跡

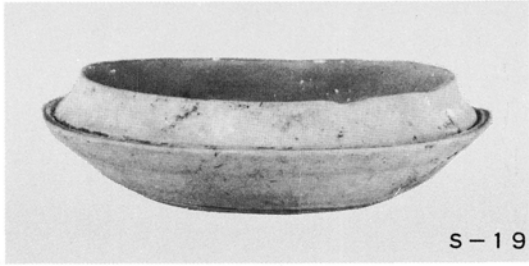
2．第１号住居跡かまど



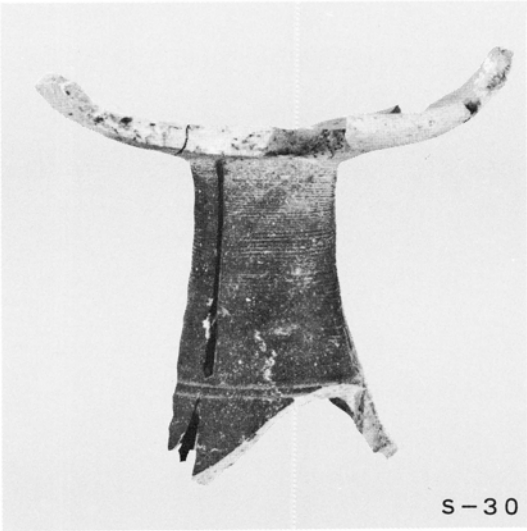
1．第1号住居跡遺物出土状況（B壁）

2．第1号住居跡出土石製品　（縮尺　2/3）

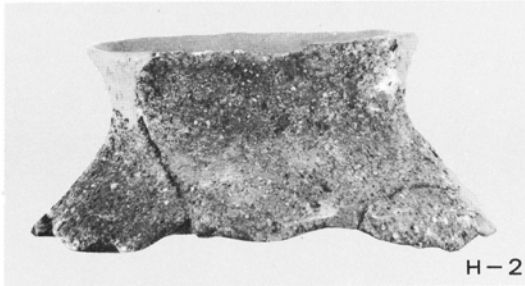


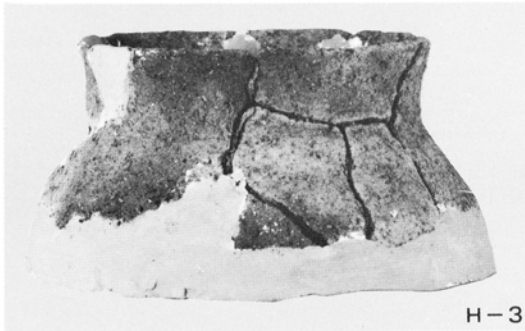


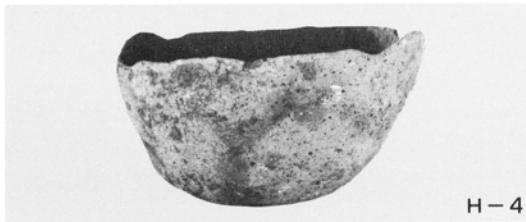
1．第1号住居跡出土須恵器



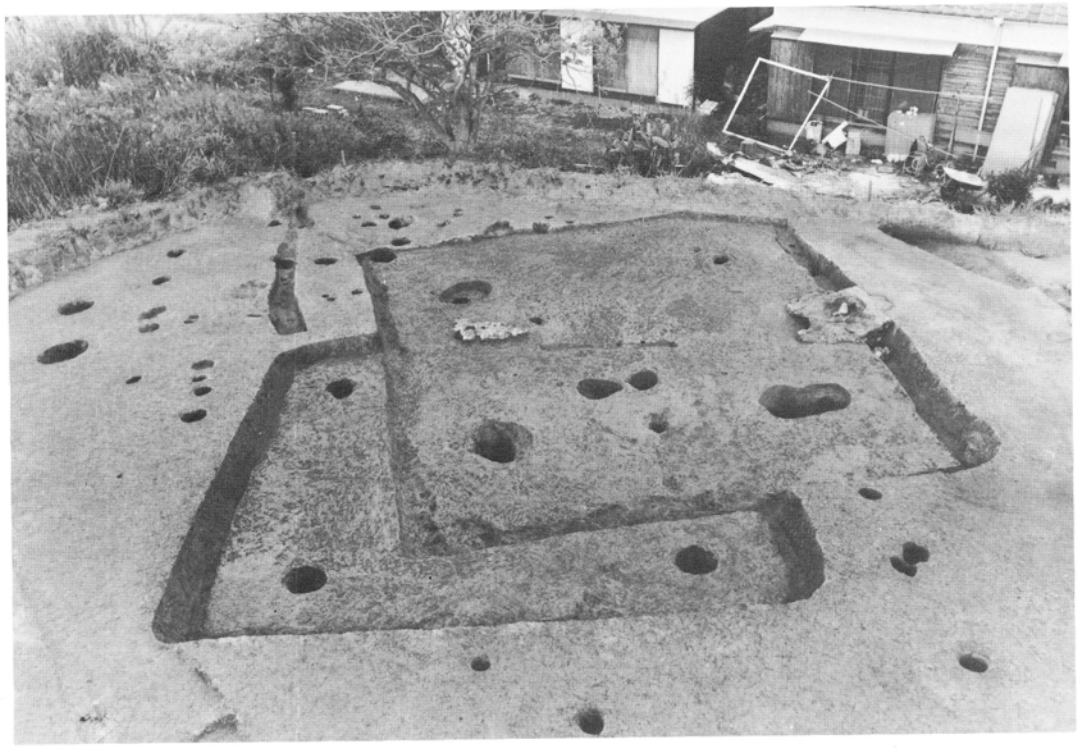
1．第１号住居跡出土須恵器



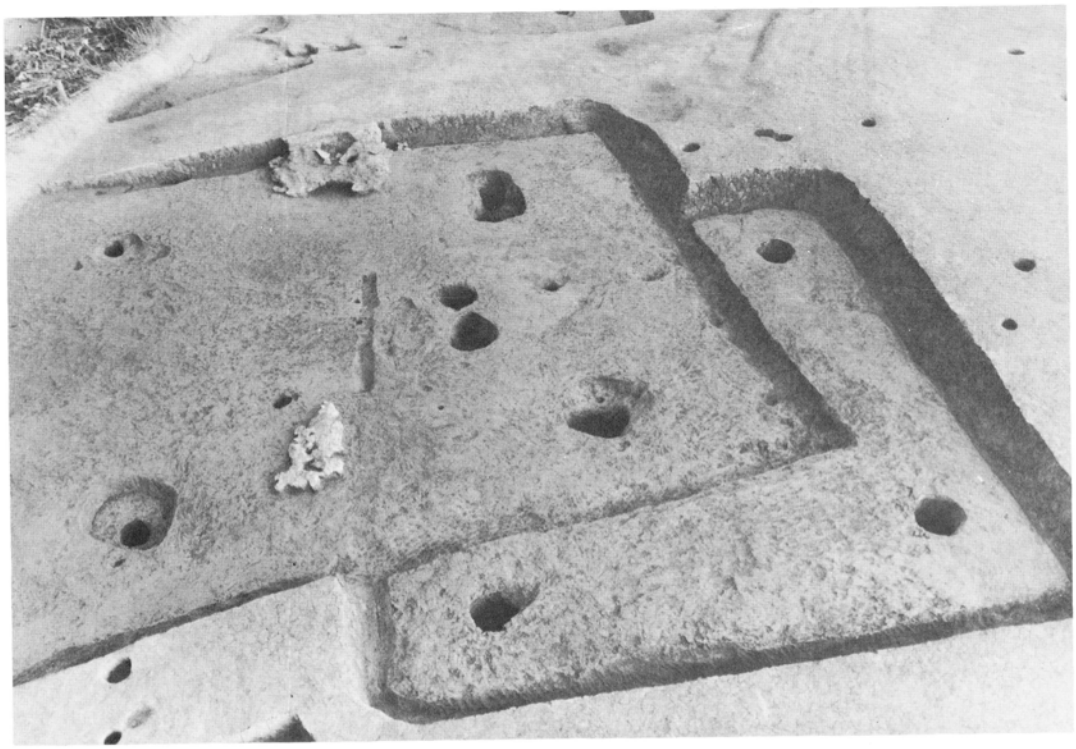




2．第１号住居跡出土土師式土器



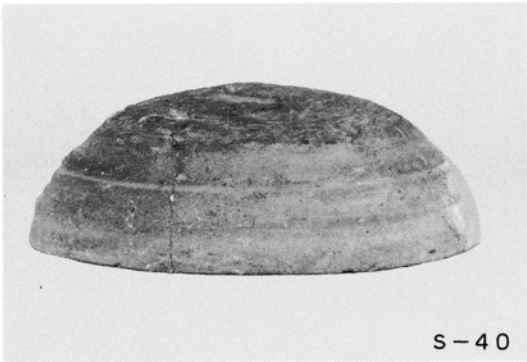
1．第２号住居跡



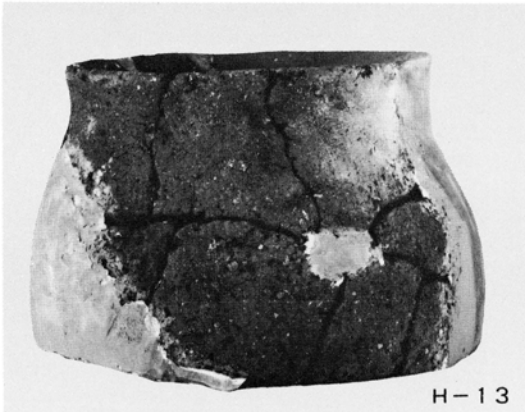
2．第２号住居跡

1．第２号住居跡かまど

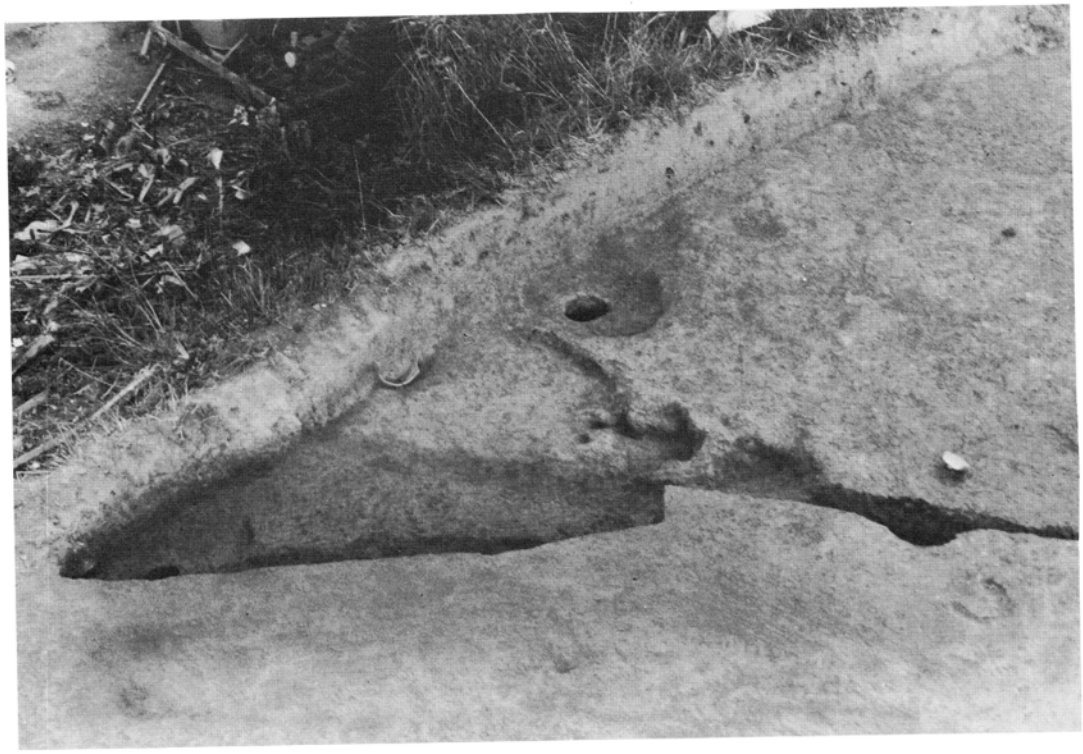
2．第２号住居跡かまど断面



1．第２号住居跡出土須恵器

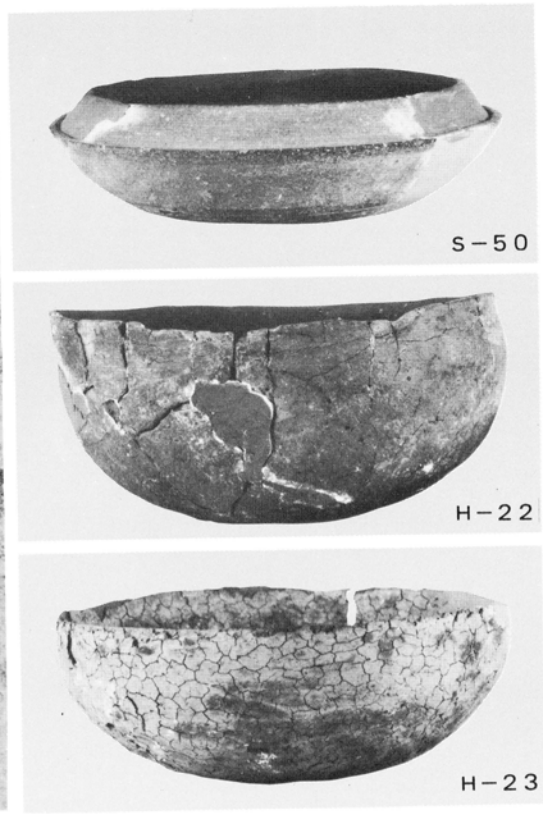


2．第２号住居跡出土土師式土器



1．第３号住居跡

2．第３号住居跡遺物出土状況

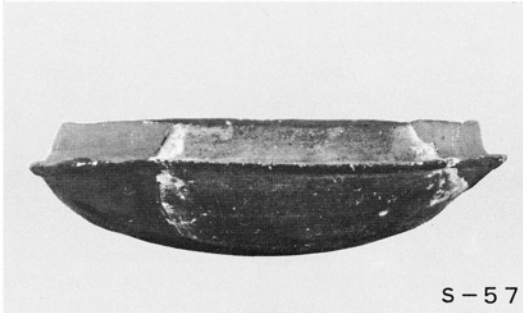


3．第３号住居跡出土須恵器･土師式土器

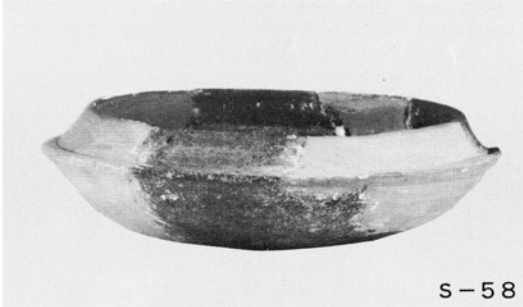
1．第４号住居跡

2．第４号住居跡

S－52


S－57

S－53


S－58

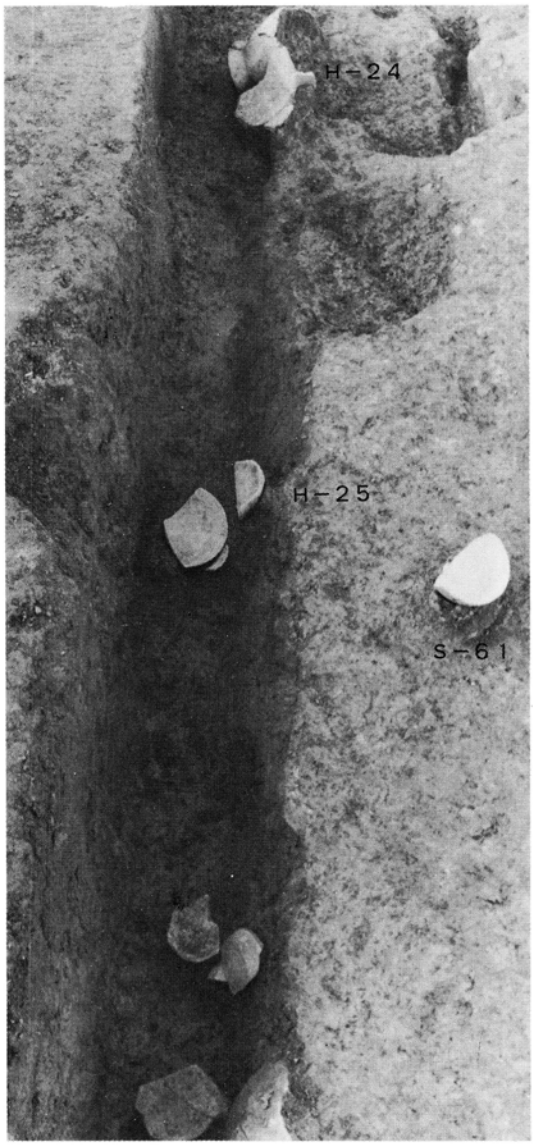
S－61

S－60

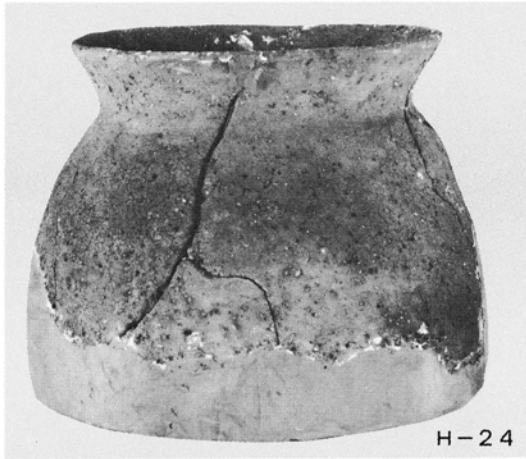
S－68

S－69

1．第4号住居跡出土須恵器



1．第４号住居跡遺物出土状況



2．第４号住居跡出土土師式土器

3．第４号住居跡出土鉄製品

福 岡 市 西 区 片 江

片江辻遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第40集

1977年（昭和52年）3月31日

発　行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福 岡 市 中 央 区 天 神 一 丁 目 7 —23

印　刷　祥 文 社 印 刷 株 式 会 社
福岡市博多区博多駅南4丁目15—17